

大東亞建設民族人口資料三六
昭和十七年三月三十日

アジアの諸民族
(第四分冊)

厚生省人口問題研究所

B60.41
90
1-76

MRJA05
26

アジアの諸民族 (第四分冊)

目次

第一分冊

序言	一
第一章 序説	五
第二章 アジアの諸民族	三〇
第一節 人種地理	三〇
第二節 白色人種と褐色人種	三〇
第三節 黄色人種	三六
第三章 アジア諸人種の起源	三七
第二分冊	
第四章 西方アジア	三九
第一節 近東の諸種族	三九
第二節 中東の諸種族	四三

第五章 印度……………

第三分册

第六章 支那……………

第七章 支那邊境地帯……………

第一節 中央アジア・チベット・支那トルキスタン……………

第二節 モンゴリア……………

第三節 滿洲……………

第四節 朝鮮……………

第四分册

第八章 極北アジア……………

第九章 日本……………

第十章 南東アジアとインドネシア……………

第十一章 結論……………

一三
一七
一七
一七
一七
一八
一八
一九
二〇
二〇
二一
二二
二三
二四
二五
二六

第八章 極北アジア

シベリアは北部アジアに廣大なる面積を占めて居り、殆んど全大陸の約四分の一の領域を構成してゐる。此所ではツラニア及びウラルからベーリング海峡に涉つて擴れる大シベリア平原と云ふ名で知られてゐる地域を問題にしよう。其れは三角形を成して居り、其の頂點はオビ河口の近くに位置し、一つの角はアラル海に、他角はベーリング海に近く、夫々位置してゐる。北面は北氷洋、西はウラル山脈、南は大山脈の連り、によつて境界付けられ、此の南部の山脈地帯に、オビ、エニセイ、レナ河の源が發してゐる。之等の境界に近附く事は地理的制約を持つてゐるので極めて困難である。

南方に於ける支那との境界をなしてゐるのは高い山脈であり、又沙漠である。北部では北氷洋が越え難き障壁を爲してゐる。東部では山脈が世界で最も端れ狂ふ海洋と此の地域とを絶縁してゐる。

たゞ西部にあつてのみ、其の境界は開けてゐる。山はあつても地圖で見ると程峻しくはなく通行容易であり、航行可能なる河が密接に接続してゐる。移動人種が通つて來たルートは此所だと考へられる。殊に南部の草原地帯を經由したものが如くである。

先づ便宜的に二つの部分に別けられるであらう。第一の部分はエニセイ河からウラル山脈にかけての西部シベリアであり、第二のものは東部シベリアである。前者は一般に第三紀層であり、南部は山脈によつて區切られてゐる。後者は地理學的には前者より一層古いものである。地表は丘陵地帯に於けるものと異つて居り、東の涯に於ては高い山脈が境界をなして居る。此の斷續的な地表は東部シベリアに接近する事を困難ならしめてゐる。

然し乍ら地理的困難にも抱らず、此の東の涯とアメリカ大陸との間に緊密なる交渉が時々存在したと云ふ所説を保證すべき充分な證據が存するのである。

全體として考察するならば、地域は極めて廣大である。巍然なる山嶽地帯によつて南部から遮斷されてゐるけれども、北部からは氣候の影響を受けて居る。それ故、シベリアは冷い大陸的氣候に曝されて居り、或る部分を除いて、下層土は常に凍つてゐる。

極く一部分が眞に北極的氣候であり、爾餘の地域は亞北極である。北極地帯はトボルスク、及びエニセイスク州の所管する地帯である。亞北極地帯は種々の地域に分割される。先づ第一には、トボルスクの南部、エニセイスク州及びトムスクの大部分。第二は最も廣い意味に於てキルグイツツ草原地帯、及びトランスバイカリア、イルクツク地帯を含めたシベリアの南東部。最後に、我々は他と異つた氣候區域として沿岸地域も考察しようと思ふ。

北極地域は種々の條件が並存してゐて、別に一致した特徴とはない。世界中で最も極端な熱と冷たさとが其所に於て感ぜられる。

夏は冬よりも、異つてゐるけれども、全體として見て氣候は極端な乾燥状態を呈してゐる。温暖なる季節は極めて短く、此の短い時期にあつてすら、氣温は低い。夏には一日中明るい、冬には一日中光がなく、而も極端な寒さと乾燥した風に曝されてゐる。最も寒冷なる所は現實の北極沿岸にあるのではなくて、中部エナ河地帯にある。亞北極地帯の中、第一のものは、屢々極寒を示す程極めて厳しい氣候の特徴を持つてゐる。アルタイ山脈では、一般に厳しい氣候であるが、高い山脈によつて北から遮られた或る狭谷では温暖な氣候を持つてゐる。第二の地帯では、平均温度約三六度(華氏)であり、明かに温暖である。殆んど雨雪なく、夏に於てすら降雨は極めて稀である。第三に南東シ

ベリヤでは、寒い季節が長く、寒い季節から暖い季節への移り目は極めて急速である。第四の地帯は極めて寒冷であり、カムチャツカでは極めて温度が高い。

北極は凍土地帯である。南部亞北極地帯は草原とアルプス州を包んで居り、屢々水に潤澤な肥沃な狭谷を成してゐる。

シベリアに關する舊考古學的解明は、特にエニセイ地帯に關して、可成り爲されて來たが、現在此の地帯の初期人類史では大部分のものが手を加へらぬ儘になつてゐる。タルコ・エリンツェウイツ(D. (Tal'ko-Hryncevics)) はトランスバイカリアに於けるオウスト、キフカタから數多くの初期の頭蓋骨を吟味した。其等の頭蓋骨はセランガ河の支流たるサバ河左岸で發見されたものである。彼の結論によれば、之等の頭蓋骨はモンゴロリアート族の近代型と異つて居り、南部ロシアのクルガン族から出たものに近似せるものである。

何か之と同様な證據がゴロシチェンコによつて齎されたけれども、彼の證據資料の存在せし時期は青銅期時代と考へられるものである。其の材料はマスクと頭蓋骨との二つに分れてゐる。此のマスクは總ゆる藝術作品にされてゐるので科學的論議を爲す場合に之が本當のものだと主張し得ぬ弱みがあるけれども、其の中の或るものはデスマスクであつたやうに思はれるから、さうなれば價値のある證據物件を提供してゐることになる。マスクは二つの型に屬してゐる。即ち所謂、タガラとチャータスであつて、チャータスはタガラから發展したものと如くである。タガラはヨトロッパ型を示して居り、チャータスは蒙古型を示してゐる。これが二つとも青銅期時代のものであるから、時代的には異つてゐない様に思はれる。

頭蓋を測定して見るとまた一つの均一型を示してゐる。尤も豫期せらるゝ如く、クルガンの二系列とは異つた平均

測定値を持つてゐるけれども、チャイタスから得た頭蓋骨はタカラから得たものよりはヨリ長く、而も著しく高い。だが或る學者が信じ勝ちな根本的な人種差異を認むべき充分な證據は別に存する譯ではない。之等のものはシベリアのクルガンのものから知られてゐる所の他の青銅器時代に屬す。頭蓋や、モスコイ地區から出たものと古いクルガンから出たものと極めて緊密な一致を示してゐるのである。九十六の頭蓋骨の中、四十二は長頭であつた。頭蓋形態から判斷するならば同一地域に住居せる現在の住民のものと異つてゐるばかりでなく、原北方型のものに寧ろ屬してゐるものと如くである。

之等の古代種族と其の近代的相續者との間に横はる溝は、未だうめられて居ない。アジアに於ては繼續的な人種移動があつたのであつて、著しい變化が比較的最近に於てさへ示されて居たのである。ドニケによつて提案された近代住民の分類は二集團を含んでゐる。第一の集團はサモイド族及東匈奴と何等かの親近性を持つた西部シベリアの種族を包含してゐる。ドニケは之等のものをエニセイ族 (Genisians) 又はトウバ族 (Tutas) と呼んでゐる。第二の集團は此の大陸の極東北地區に於る住民から構成されて居り、之をドニケはシレンク^(L) (Lyon Schrenk) に従つて (Palaeasians) と呼んでゐる。第一の集團の中には彼はアジアのサモイド族及び二つの顯著なる集團たるエニセイ河のオスチャーク族、支那史のトウポウ族を含ませ、之をアルタイ族と呼んでゐる。更に一層南方の住民を彼はトルコ人種及びモンゴル人種として一括してゐる。モンゴル族を彼はヨーロッパの或る人種と體質的には同一のものとしてゐるけれども、決して同値的なものではない事は認めてゐる。トルコ人種を以つて前者よりは一層體質的に同値性あるものと彼は考へてゐるが、兩者をモンゴロイドと呼ぶより外は、相互の關係に關する意見を表明して居らないやうである。

ツアブリカはドニケの分類の基礎の上に立つた分類を更に試みた。彼は (Palaeasiatics) と云ふ通常使用される意味の言葉を無意味なるものとして、(Palaeo-Siberians) と (Neo-Siberians) との二つの主要群に分けた。パレオシベリア系の中には次の如きものが含まれてゐる。

- ① チュクチイ族。アナデイル河と北極洋との北東シベリアに居住してゐる。
- ② コリヤアク族。アナデイル河とカムチャツカ半島の中央部との間のチュクチイの南部に居住してゐる。
- ③ カムチャダル族。カムチャツカ半島の南部に居住してゐる。
- ④ アイヌ族。
- ⑤ ギリヤーク族。
- ⑥ エスキモー族。ベーリング海峡のアジア側に居住してゐる。

此の他、此の章に限界付けらるべき地理區別外のものとして、アリュウシヤン群島に居住せるアリウト族がある。ツアブリカはユカギイル族が低ヤナ河と低コリマ河との間に住んでゐると述べてゐる。だが之等のものは絶滅したとボゴラス (Bogoras) によつて主張されてゐる。

チュヴアンツイ族はアナデイル河の上流及び中流に居住して居り、エニセイ河のオスチャク等は低ツングスカとストニイツングスカとの間の低エニセイ河に居住してゐる。之等の種族と他のものとの間の差異と云へば極く微小なものであるけれども、一應之等の分類を爲して置く事は極北地區の種族を理解するのに便宜なものと考へられる。次に新シベリア系種族はそれよりも一層細分された集團を形成してゐる。

① フィン種族 (Finnic tribes)

ツアブリカが二つの集團に別けたものであつて、其の一のウグリアオスチヤア族であり、他はゾオグール族である。

② サモエデ種族 (Samoyedic tribes)

之等の中に含まれるものは極北地區に居住するもので、カクンガ河口からウラル山脈に渉る地域を占めてゐる。

③ トルコ種族 (Turkish tribes)

體質的觀點から見ると、不合理のやうに思はれるけれども、人種學的觀點から見れば極めて便利な分類である。之は分れてツラニア族とシベリア族との二族となる。此所ではシベリア族のみが關心の對象となる。

だがツラニア、トルコ族の或るものは、時代を異にする度に其の地域を變へて居るのである。此の中最もよく知られたものはキルギイツツ族であらう。中央アジアの數多くの種族と同様、大多數の之等種族の特徴とする所は實に短頭たるにある。而してフリート族の間の短頭的要素と、同様なる集團に彼等が屬してゐるものゝ如く思はれる。イワノフスキーによつて報知された之等キルギイツツ族の一集團は平均頭形指數 (Mean Cephalic Index) 八九・四を有してゐる。總て之等の種族中、頭幅は恆常値を示してゐるが、頭長は可成りの變動値を示してゐることが述べられてゐる。之がパレアン人種と區別するべき點であらう。

キルギイツツ族集團と極めて大なる對照をなすものは東方トルコ族である。この中にはヤクウト族、カザンタール族、バスキル族、ソチ族及其類縁族が含まれてゐる。之等の種族は何か低身長のものゝ様であり、殊にヤクウト族に就てこの事が言へる。だが身長に於る之等の差違はキルギイツツ族集團と區別するに充分なる徴標ではない。だが頭形指數は本質的に異つてゐる。之等の種族は其の點で一致して居り、八二から八三の値

を持つてゐる。總ての觀察者は此の點では意見の一致を見てゐる。其れ故、我々は其れを以つて信すべき數字と考へて宜しいやうに思はれる。頭長はキルギイツ族よりは長いが、頭幅は二〇ミリメートル短いやうである。之等種族の人種的關係は何か漠然たるものがある。最近になつて彼等がモンゴルと數多く混淆する様になつた事は明瞭であるが、大抵のものは體質的にモンゴルと多方面に於て異つてゐる。彼等は大部分アルプス人とパレアシア人との混淆種族なるものゝやうであるが、彼等の血管の中には其の他の血も恐らくは流れてゐるであらう。

其れ故、オスマントルコ族及びイラニアトルコ族の場合に於ると同様、トルコ人種に付いて語る事は不可能であるが、種々のトルコ體型は ("Turks") 其の地理的環境と歴史を異にするに従つて體質的に異つてゐることが知られるであらう。

文化的にも肉體的にも之等トルコ種族と關係あるものとしてシベリアのモンゴル種族がある。其等のものはトルコ・モンゴルと云ふ名の下にトルコ族に屢々入れられてゐる。シベリアに於けモンゴル種族の唯一の代表者は嚴密に文化的意味に於ては、バイカル湖畔のカルカ族、ブリアート族である。

④ ツングース種族 (Tungusic tribes)

最後に言語學的にツングース族として記述さるべき極めて重要な種族集團がある。本來のツングース族は東經60度から太平洋にかけて、及び北極から支那邊疆にかけて見出される。混淆の度合を異にした他のツングース系種族は數多く存在してゐる。滿洲族は之に屬するが此處では除外する。此處でツングース系種族に屬するものとしては、チャボギ族 (Chapogi) ゴルチ族 (Goldi) ラムート族 (Lanutt) マンヤグ族 (Manyars) オロチ

族(Oroch)オロチオン族(Orochon)オロク族(Oroke)ソロン族(Solon)等が挙げられる。

パレアジア系種族に關しては可成りの資料が之迄集められて來た。生憎其の貴重なる資料は現在、體質人類學にふれる内容を有する事誠に少いのであつて、我々は唯、ヨヘルソン・プロツドスキイ夫人の筆によつて物された短かくはあるが價値ある論作を有してゐるに過ぎない譯である。彼女が蒐集した數字ではパレアジア系統は決して等質的集團ではない事が示されてゐる。最も顯著な特徴は身長の低いことである。確かに此の低身長は彼等に具備されてゐる本質的特質と云ふよりは寧ろ、彼等の屬してゐる環境の極端なげしさに基く結果であらう。チュクチャー族、コリヤーク族、アジアのエスキモー族、其れよりは低度のカムチャグル族等は極端に低身長の種類ではない。頭形指數^{ヒツツクシテツクス}は約80である。コリヤーク族、カムチャグル族及びオスチヤーク族は一層長頭であり、或る觀察者はギリヤーク族が極端に短頭型である事を提案してゐる。ヨヘルソン・プロツドスキイ夫人によつて引用された數値は86以上の値を示してゐる。其の他の頭形指數が互ひに比較される場合、其の差は決して之程著しくはないのである。然し乍ら其等のものゝ間の相違は充分本質的なものであり、地方的差違が存するのである。

一般に之等の種族は極めて異質的なものである事が提案されて來た。一見すれば之は自然な説明と考へられよう。然し乍ら、標準偏差の示す所から判断すれば、彼等は少く共著しく純粹な型に屬するものゝ如くである。例へばコリヤーク族の頭形指數の標準偏差は三以下であり、其の種族が著しく同値的たる事を暗示する充分なる徵標と考へられるのである。チュクチャー族になると一層この關係は著しい。それ故彼等の起源が如何なるものによまれ、之等の種族が少くとも著しい人種統一度に達して居つたとする事は可能であると思はれる。

シロコゴロフ(Shirokogoroff)は彼の所謂第一回人種移動時代(紀元前約四萬年頃)に之等の種族はゴビの北

及び東の全地域に位置を占めてゐたが、ツングース系種族の壓迫により其れより二千年後には其の地帯から追出されてしまつたと説いてゐる。根元的には彼等は、原北方人との初期の混濁及び黄色人に近い種族系との混濁であつたやうに思はれる。又同一種族と分類されてゐるアイヌ族は恐らく黄色系との混濁度ヨリ少きものと思はれる。

之等の種族は亞細亞と亞米利加大陸の間を環流してゐたものと思はれる。多くの特徴の中、殊に黄色人の代表的なもの、中に見出されるものよりは一層極立つて發達した顴骨の隆起はアメリカ系を聯想させる。だがアメリカ系は屢々身長、頭蓋形態の點で彼等と異つてゐる。早期に於て、此の黄色系とパレン系とを分離した現代のトルコ語及蒙古語を話す種族と共に或ひは其れに先立つて、西方からの種族侵入運動があつたものと考へられる。

倅、次に興味ある詳細な點を少しく考察して見よう。アメリカ及びグリーンランドの Eskimo 族は特殊な人種であると云ふ理由によつて、或は彼等の服する異常な自然條件に特殊化されてゐると云ふ理由によつて人類學者の間で可成りの注目を引いてゐるものである。之等の諸特徴の中の一つは長頭たることである。アジアの Eskimo 族は丸い頭をしてゐると云ふ點でグリーンランドのものとは異り、一般にはパレンシア型に一致してゐるものである。兩者間に關係があるとかないとかを穿鑿し得る程此の種族についての研究は未だ充分爲されて居らない。たゞアジアの Eskimo 族は極めて狭い鼻をしてゐると云ふ事は興味深い。

パレオシベリア種族は、北アジア大陸に生存する最も古い層であるようだ。彼等は或る程度異つてゐるけれども、さう大した程度に相異してゐるものではない。彼等は極めて往昔の時期に於て、原北方系又は現在アイヌによつて代表されてゐる此の型に似た或る型、と初期の黄色人との混濁と思はれるが、現在の所ではそれも正確には判らない。果して然りとすれば、可成り古い事に屬するに相違なからう。

新シベリア種族は最近になつて人類學者によつて相當の關心を持たれたものである。ルーデンコ(D. S. Rudenka)は其の西方種族の現在分布を興へてゐる。サモエド族は現在歐ロシアの北東地帯及びオビ、エニセイ兩盆地の最北部に見出され、トムスク及トボルスク州のオスチャーク族は河境に沿つて見出される。ヴォグール族はサスプア、シグプア兩河盆地及び、トレンスク、トボルスクの北西地區、ベルムに發見される。サモエド族は約二%のブロンドで眼は明るい。其の他のものは之よりブロンドの度合が少い。身長は總て一五七糎。サモエド型は、オスチャーク型より著しく高くボルグ型よりは幾分高い。筋肉は充分よく發達して居る。短頭で、顔は長く廣い。頬骨は出てゐる。前額は相對的に狭く、中鼻型である。齒槽顎(alveolar prognathism)は可成り突き出てゐる。眼及び毛髮の色は一般に暗色を呈してゐる。

ヴォグール族はサモエド族より座高が高いが兩者の身長は同じである。彼等は共に長頭に近い。彼等の顔は小さく、頬骨は發達して居らない。前額は廣く、鼻は殆んど平たいと云つて良い。

オスチャーク族は中間型を現はしてゐる。彼等は恐らくヴォグール族と同一人種に屬してゐるようである。

若しサモエド族が他のアルタイ系種族たるコイバル族等と比較される場合、肉體型の差違は直ちに明瞭である。同一型に屬する唯一の種族はウリアンカイ族であつて、之はゴロシチエンコによつて既に吟味された所である。兩方とも同様な色であり、頭蓋形態、長顔等同様である。

之等興味ある種族の起源及び關係は不明確である。彼等は全體として見れば、パレオシベリア系と異なるばかりでなく、恐らく其の他のものとも相當の差違がある。例へばオスチャークと云ふ語は唯にオビ、エニセイのオスチャーク族を包むのみならず、又他の集團をも含んでゐる。

ルーデンコはサモエド族とラップ族との間には關係があること、アルタイ地區から西方に向つての移民があつた事、南方からの移動種族によつて西部集團と東部集團とが分割された事、等を提案してゐる。

特別なる論鑿を必要とする若干の特徴がある。先づ第一に、之等の種族は北方種族と同様に身長が極めて低い。之は環境に基くやうに思はれる。第二に彼等は通常、黄色人の或るものと結び付けらるべき特徴を持つてゐる。通常頭は丸型であり、必ずしも黄色人と高度に關聯あるものとは限らない。彼等は亦、長頭であつて、ブロンド色を交へてゐる。更に彼等の血液に於る一つの重要な傾向はルーデンコが提案せる如きアルタイ地區からの移住に基いてゐるらしい。ボグール族の如き種族の中にあつて、其の頭蓋形態及色彩の差違は北方型又は原北方型との混淆に基いてゐることを暗示すべき理由がある。如何なる場合にまれ、之等歐亞型は可成りの人種的混淆の結果たるものと思はれる。

ツングース族

新シベリア種族は必ずしも人種的に結びついてゐなくとも通常同一集團を形成してゐる所の同一文化的類縁關係に立つた他種族を論ずるに際して、所謂トルコ族は一層便宜的に取扱はれる種族であるかも知れない。

情、それからツングース系種族が最後に残つてゐる。純粹なツングース族の肉體特徴はツナプリカ⁽⁶⁾によつて記述されてゐる。彼等はサモエド族程低くはないけれども、平均以下の身長であると彼女は云つてゐる。此の記述はツングースがモンゴール(二六三種)と同一身長であると報告する其の他の觀察者の述作と全く一致して居らない。頭は總ての觀察が一致して云ふ如く著しく長し。頭長(head length)は低頭(low head)たるモンゴール族との混淆によつて影響される場合を除いて、通常相對的に高し。頭幅はまた通常大きいから、ツングース族は大頭蓋を持つてゐる譯である。ツナプリカによれば顔は長く、鼻は狭い。彼等は南方支那人及び或る日本人に最も近くモンゴールとは似て

ぬふと結論してゐる。

シロコロフ (Sirokogoroff) は寧ろ其れとは異つた見解を持つてゐるようである。ツングース族中の基本型はバ
ルグツインのツングース族中に發見されると彼は云ひ其の特徴を擧げてゐる。 (S. 6)

(一) 極めて低身長であること。

(二) 低頭形指數 (low cephalic index) を有してゐること。

七七。

(三) 低鼻形指數 (low nasal index) を有すること。

七七。この點では全ての觀察者の意見は一致してゐる。

彼はまた之等の種族の前額指數 (Frontal index) の低い事に關心を持つてゐる。彼は此の型が支那人中の單なる
附隨種族 (Incidental) に過ぎないものと信じ、ツングース族が人類學的觀點から見ても同種族に非ずと云ふ難局を
切抜ける最經の途であるとしてゐる。純粹ツングース族の型の規定はそれ故、最近までモンゴール族と混淆しな
つた集團が、或は他の種族が觀察者の眼にとまるかどうかにかゝりて依存してゐると云つてよからう。

シロコロフはツングース族の起源及最近の移動に光を投すべき興味ある文化的資料の數々を蒐集して居る。彼の
提案せる所によると、彼等ツングースは早期に於ては溫暖なる地方に居住して居つたが (恐らくは支那大平野)、現在
居住せる住民の繼續的移住によつて押出されたものゝ如くである。初期基督教時代に彼等はトルコ族の起源たるヤク
ト族の侵入によつて二分されたと彼は考へてゐる。斯る説はツングース族が南方支那人に最も近似せるものとする
ツアブリカの提案を否定してゐる事とならう。

ツングース族の現實の人種的位置は之等の移動に關する提案によつてヨリ簡明化されてゐる譯ではない。彼等は明かに極めて他のものと混淆して居り、大抵の場合には其の縁を解きほぐす事困難である。若し我々がシロコゴロフの基本型を眞のツングース族を代表するものとして認めるならば、それと關聯さすべき決定的な型を發見する事は困難となる。彼等は頭の大きさに於て支那の南部原住種族とは明かに相違してゐる。彼等が黄色人の初期の系統に屬し、混淆と移住とによつて變異せるものとする事は妥當のやうに考へられる。之等の環境の下に彼等はバレオシベリア人に近いものと考へられ、彼等は其れと混淆したものと考へられる。

第八章 關係文獻

- (1) Tylko-Hryniewicz, J. D. (Early Inhabitants.) *J' Anthrop.*, 1896 VII. 80.
- (2) Merhart, G. von. (Archaeology of Yenesei.) *Amer. Anthrop.*, 1923, XXV. 21.
- (3) Goroshchenko. *Bull. Krasn. S. E. Sib. Sect. I. R. G. S.*, 1905, 1.
- (4) Goroshchenko. (Soyotes.) *Russ. Anthro. Journ.*, 1901. II. 2.
- (5) Goroshchenko and Ivanovski, A. A. (Yenesei.) *Russ. Anthrop. Journ.* 1907. i. and ii.
- (6) Ivanovski, A. A. Anthropological Composition of the Population of Russia. 1904.
- (7) Ufal'vy, C. E. Expedition scientifique en Russie, Sibirie et dans le Turkestan. Paris, 1878.
- (8) Jochelson-Brodsky, Frau D. (North Siberian peoples.) *A. f. A.* 1906, N. F. V. 1.
- (9) Czaplicka, M. A. Art. Ostyak and Samoyed. *Hastings Ency Religion and Ethics.*
- (10) Roudenko, S. (Samoyed, Ostyak and Vogul.) *Bull. Soc. d' Anthrop.*, Paris 1914 (Series VI) V. 123.

- (11) Grahmer, W. (Samoyeds) Z. f. E., 1 1912, XLIV, 105.
- (12) Montefiore, J. (Samoyeds) J. A. L. 1894, XXIV, 400.
- (13) Charusin, A. (Kirghiz.) Imp. Soc. Friends of Nat. Sci. Anthropol. Moscow, 1889, LXIII, 1.
- (14) Jessup North Expedition. Various Authors. (A mine of information on all these northern tribes.)
- (15) Bogoras, W. Amer. Anthropol., 1901, III, 80.
- (16) Iden-Zeller, O. (Chukchee) Z. f. E., 1911, XLIII, 840.
- (17) Schipenck, L. von. Reisen in Amur-Lande. III. st. Petersburg, 1891.
- (18) Czaplicka, M. A. (Tungus.) Scottish Geo. Mag., Edinburgh, 1917, 299.
- (19) Seeland, (Gitvakes.) A. f. A. 1900, XXVI, 790.

第九章 日本

日本は其の地理的性質及び住民の體格に關して今迄我々が取扱つて來た大抵の國と強い對照をなしてゐる國である。大日本帝國は、若し我々が最南端たる臺灣と千島群島の北端とを含めるならば、北緯二一度から五一度に涉つて擴れる一長群島を構成してゐる。最も大きな島は九州、四國、本州及び北海道として知られてゐる。北海道は外國地圖には通常蝦夷と記されてゐる。日本々土には、約一五〇、〇〇〇平方哩の地域を包含してゐるが、其の中主要土たる本州は非常に大なる部分を占め、英本土の地域と略々等しい。

全國は極めて鋸齒狀を呈して居り、數多の島と灣を持つた長い海岸線を構成してゐる。數多くの火山脈が走つて居り、日本は特に地震に曝らされてゐる。川は通常短く急流でありその結果短距離間の交通を除いては、交通に役立つやいと云つて宜しい。日本の約四分の三は山嶽であり残りの七割は高臺から成つてゐる。島嶼地帯のために、日本の氣温は熱帯から北極の氣候を其の範圍としてゐる。然し乍ら、日本々土に於ては、此の範圍はせばめられ、従つて氣候は北海道の北部を除いて適度の温度で、年平均青森では四八度、鹿児島では七八度である。更に一般的に云ふなら、本土の年平均温度は華氏五〇度―六〇度と云つて宜しからう。南西日本には殆んど雪はないが、其の他の地域では年々ある。夏季、太平洋沿岸には最大降雨量を見、冬季は其の反對である。之等の條件の爲に、植物は豊富であり、全體として見れば温帯氣候の其れと云つてよい。

日本の島嶼は、本土沿岸からひどく離れてゐないけれども、充分分離してゐると云へる距離を持つてゐる。日本人が其の近隣と充分分離した肉體型を發展させたのは之等の事情に基いてゐるのである。地理的に云つて日本本土が初

期に北海道と二分されたと云ふ事は充分注目し値すると云つてよい。此の島に於る氣候條件は、また爾餘の日本に於けるよりは一層極端であり、其の結果、日本人が爾餘の日本から其の祖先を驅逐したけれども、其の北海道拓殖は極く最近の事に屬する事となつたのである。

日本人科學者の學績により我々は、アジアの他の部分よりは一層よく日本の考古學に關する知識を護ることが出来る。古墓を見ると總てが新石器時代に屬する性格を持つて居り、換言すれば、墓には金屬を缺除してゐるのであるが何か顯著な粗雑なる土器が通常存在してゐる。

最も重要な遺蹟の中の或るものについては濱田氏⁽⁹⁾によつて論ぜられてゐる。河内の國の國府の遺跡から若干の新石器時代の人骨が發掘された。頭蓋骨はアイヌのものに似てゐる。顔はアイヌと比較すると廣く低い。眼窩は低く鼻は廣い。口蓋は短く廣い。顔及口蓋の長さはアイヌより短く、顔は一層正常顔である。背柱は四肢に比して短い。背柱の頸部は比較的強く大きい。之等の特徴はアイヌ族のものたる貝塚から發見された人骨の持つ特徴でもある、と小金井氏は考へてゐる。

隨分數多くの骨格が備中及び和泉の國で發見されたが、之等總ては、同一型に屬するし、其の特徴は興味を引くものである。骨軸の中央部に於ける大腿骨及上膊骨の扁平性はアイヌに於るほど、新石器時代の骨格には明かに現れて居らない。他方では、新石器時代の骨は一層、アイヌ人と日本人とを區別する特徴を現してゐる。それ故、石器時代の住民は現在のアイヌの祖先たるものではなくして、多くの場合恐らくアイヌ人と日本人との中間的人種たるものゝ如し、と濱田氏は結論してゐる。

松本氏のはそれとは寧ろ異つた見解を持して居られる。彼は石器時代の住民中少くも三つの型のものが區別され得

るものとする。之等のものは其の発見された場所から、青島、宮戸、津雲と彼は呼んでゐる。先づ第一の型に於て、成人男子は、身長約五呎六吋、大きな頭、長頭型か中頭型かである。此の型の骨格は青島及宮戸島で発見された。宮戸型は津雲と國府で発見された。之等のものは矮少なものであつた如く、成人男子の身長は前の型のものより二吋低いものとされてゐる。其等は短頭型か中頭型であつて、津雲から発見されたものは宮戸からとれたものよりも短い頭をしてゐる。最後に「津雲」及び「國府」から発見された高身長型がある。彼等の身長は成年男子で五呎六吋と七吋の間の値を示してゐる。頭形指數は中頭型と短頭型との間の値を示してゐる。最初の二つの型は今日のアイヌ族の中に現れてゐる特性なりと松木氏は考へてゐる。

此處に同じ材料から出發して全然異つた二つの見解が表明されてゐる譯である。一は古代人をアイヌ人と結び付け、他は異つた人種に屬するものとする。

考へらるべき第一の點は、新石器時代の住民が果してアイヌと同一なる體型に屬してゐるや否やにある。文化的證據は其の相異性を示してゐる。最近の紹介を見るならば、アイヌ人は土器製造の知識を全然持つてゐなかつたやうであり、彼等の使用する容器は櫻の木で作られたものであつたやうだ。この事から見て本土に住居せる人間が北方のものよりは一層進歩せる文化的條件の下にあつた事は確かである。

古代人をアイヌ人と結びつける事を不可とする濱田氏の主要なる反對意見は脛骨と大腿骨の形態であるように思はれる。然し乍ら *Platymeria* や *Platymeria* の問題は決定的な人種特徴とは考へ得られない。其の正確な起源は現在不明確であるけれども、彼等が恐らく現實の人種的特質に基くと云ふよりは寧ろ姿勢又は歩態の習性に基くものゝ如くである。オックスフォード近くの所からとれた初期英國人の骨に於ては其の *Platymeria* や *Platymeria* は

極めて共通なるものがあり、明かに一定の住民層に属するものであつた。其れは其の他の點は祖先に似る所多いが今日の住民には生じて居らないものである。勿論アイヌが文明社會を現してゐないのであるから其の對比は好適なるものではない。だが少くも我々は特殊なる點では異つてゐても確かに同一人種に属してゐる同一集團を獲得する事が出来るものと思ふ。全體としては濱田氏ですら兩人種の頭蓋が極めて相似してゐるものと考へてゐるのである。結局二つの型の間には本質的な差違はないものと考へられる。此の結論は松本説に一致する。

生物測定學派の業績は一定の條件の下に、正規的變異が如何に大なるべきかを示した。小金井博士はアイヌ人を慎重に研究したけれども、我々は古代人について何等統計的記録を現在我々は有して居らない。確かに多くの點でA型及びB型は單一型の變動を示してゐるやうに思はれる。資料が除外してゐるので確言は出来ないが、更に資料の蒐集を見れば、アイヌ人が日本全土に涉つて日本人の祖先であつた事が言はれ得るのでないかと思ふ。之等の新石器時代の住民がアイヌ人の直接の祖先であつたか又は其れ以上の波に属するものであるかどうかは現在不明確である。

松本氏は之等の型の移動及分布に關して極めて巧緻な説を表明してゐる。彼は青島型が最初に日本に到着したものとしてゐる。彼等は純粹なる人種として、或は中石器時代に於て次の型と混淆せる人種として北東日本に存在した。現在北海道のアイヌは此の混淆人種に當るものとされ、千島及び樺太のアイヌは土着純粹型に當るものと云はれてゐる。

次に到着したものは宮戸矮小型であつた。此の第二の型は現在日本々々の北部の中央部にあり、其の親縁種族も亦南西日本に撥見される。

津雲型は中世紀時代以降日本に見出さるべきものと言はれてゐる。今日それは日本の各地方に分布してゐるけれど

も、特に西日本の北部に見出される。最後に到着したものは岡山型と呼ばれるモンゴリア系統であつて、其の重要性については日本人を取扱ふに際して論議されるであらう。彼等が混浴した種族は大部分後に來りたるものであつて、其れは元來、比較的接近し得べき地域に見出された。それ故、最も初期に到着したものは、生存してゐるし、其の後のものへの依存性も保たれてゐる。

此の極めて巧緻な圖式は我々が三つの肉體型を確保し得ると云ふ決定的な假定の上に立つてゐる。然し乍ら現在の所、斯る假設を證明し得べき資料を欠缺してゐる譯である。全體として見れば、其れは文化的變動とは關係なきものと云つてよい。何故なら、少くとも三つの時期は日本の石器時代のものとして認識され得るからである。

倭それでは日本の現在の住民はどうであらうか。彼等は分れて日本人とアイヌ人となるが、假令近代日本人の血にアイヌの血が多數流れてゐるにしても、人種的には極めて異つてゐる。アイヌ人は短い丸い胸と、薄く重い肋骨とを持つた頑丈な體格の持主である。皮膚の色は黄色と云ふよりは寧ろ暗色である。屢々オリーブ色の肌を呈してゐる。男は身體全體が毛で被はれてゐる。女は腕や足に薄く短く黒い色を持つてゐるが、身體には毛が生えてゐない。頭髮は多少直毛であるが其の末尾は男も女も縮れてゐる。青年の鬚は波打つて居り、老年になると其れは縮れてゐる。其れは日本人の物とは其の組織が極めて異つてゐる。日本人のは眞直ぐで絹狀であり、アイヌは粗で黒く、觸れると固い感じのするものである。

眼は斜ではなくてヨーロッパ人のその様である。色は通常明るい褐色を呈してゐる。

身長は通常短く、男一五八糎、女一四八糎である。頭は通常大きく約七六の指數を持つ長頭であり、女は微少年ら男子より廣い頭を持つてゐる。顔面は廣いけれども平らではない。前額の時として高いけれども、常にさうではな

い。瀨嶺隆起線は通常充分發達して居り、後頭は突出してゐる。眉毛は大きな一線を形造つてゐると云ふ意味に於て張り出てゐないけれども、通常鼻の根元で初まる窪みのために嵩ばつて現れてゐる。

鼻は眞直ぐである。極端に狭い鼻のある場合があるけれども、通常さうではない。或るものは極端に廣い鼻を持つてゐる。

アイヌ族の人種的地位は極めて興味ある問題である。彼等が其他の東洋人種と著しく異つてゐるのは殆んど確かである。

所でアイヌがヨーロッパ人種に近い種族であると云ふことは確かのことである。人類學者は過去に於て之等アイヌ族を今日現實にヨーロッパに現れてゐるものに限定し勝ちであつた。アイヌ族を之等の如何なるものとしても區別することは明かに不可能の様に思はれる。彼等の長頭は最初に其等の種族の長頭を持つたものに近い事を暗示してゐる。然し乍ら、彼等を北方種族と呼ぶには餘りに黒過ぎる。また地中海種族は極端なる解剖學的構造を持つてゐる。地中海種族は骨格しなやかで、頭小さく比較的細い骨で出来てゐる。アイヌは之とまるきり反對である。

そこで、若しアイヌ族がヨーロッパ人種に近い種族であるとするならば、現在ヨーロッパに生存してゐる種族と分離した所以を言及する事が必要である。此の事の中には何等固有なる難しさは存在しない。我々は既に若干のアジア人種が、明かにヨーロッパ人種と親縁關係を結んで居つたにもせよ、何等明白な鑿型の中にはめこめないと云ふ事を識つてゐる。然し乍らアイヌ族は特殊なる場合を現して居り、他の種族とは異つたものがある。他の集團はヨーロッパ種族と異つてゐるとは言へ、それ等は少くとも或る程度までは、同様な一般的區分に對應してゐるのである。

併、彼等をして歴史以前の種族たりとする提案は一見極めて暗示的なものゝように思はれる。然し乍らアイヌ族の

間に特殊化された事實は高度に認められる。之等の事情の下に、アイヌ族をヨーロッパ有史以前の最後の生存者たりとする事は出来ないようである。またヨーロッパの初期の人種の中にも、まさしくアイヌ族に一致する種族は發見し難い。それ故アイヌ族が、伯父と有史前の種族に親縁關係を有する其の後繼者と云ふ關係ではなくて、寧ろ從弟として、即ちヨーロッパ人種と同一の種族幹から派生せる種として、現在のヨーロッパ人種に結び付けてゐるものとする方が最もよい提案と考へられる。

アイヌ族は文化的には極端に原始的な段階にあると云ふ事が注目されねばならない。彼等は實際前新石器時代の段階にあり、さもなければ新石器時代文化への推移段階にある。唯、女のみが農業に携はり、其の農耕器具は貝で出来てゐる。男は原始的狩獵に従事してゐる。彼等は一度覺えた技術を忘れたのかも知れないけれども、土器製造の知識を全然排除してゐる。此の文化の原始性のために、人類學者はアイヌ族をオーストラリア人と結び付けて來たものである。だが之等二つの集團の骨格を慎重に吟味してみると、この二つのもの、關聯が不充分なる事を示してゐる。關聯説の基礎を置いてゐる頭蓋骨が極端に相違してゐるばかりではない。其の他の骨も明かに相違を示してゐるのである。オーストラリア人の骨格は總て比較的か細いのであるが、既に述べた如くアイヌ族のは頑丈である。

偕、殘る問題はアイヌ族と同一種族から出た他の人種との結び付き如何の問題である。此の課題は必要なる報告書の缺除してゐるために一層困難な問題となつてゐる。早期の古墓の或るものから得られた報告によると、初期の住民は多くの點で現在同一地域の住民とは異つてゐる。

而も其の中の或るものはアイヌ族ではないかと云ふ感じを興へるものがあるようである。其の關聯については現在完全ではないようであるけれども、少くとも「原北方人種」が黄色人種の進展以前に北方アジアに居住して居つたので

はないかと云ふ暗示を與ふるものがある。

此の説の是非については中央アジアの考古學が知悉されるまで其の決定を待たねばならない。とまれ、アイヌ族が此の人種の成員であり、東アジアの原住民であつたと考へる事は理由あることと思はれる。彼等は大なり小なり近隣民族、殊に日本人に影響を與へたらしく、また恐らくアムール地帯の種族、ギリヤーク族には著しく影響を與へたものらしい。

日本人自身については、多くの點でアイヌ以上に人種學的問題を包んでゐる。昔の人種學者(殊にベルツ)は日本人の二つの型を認めた。第一は美しい型であつて、之は長頭、面長な顔、男の眼は眞直ぐ、女性に於ては多少斜である。上層階級の中には薄い凸狀の鼻の持主が見出される。第二の粗悪型は細長い身體、丸い頭、顴骨のよく發達した廣い顔、細い斜眼、扁平な鼻、幅廣い口等の持主で、之は下層階級の特徴である。ベルツ⁽³⁾は之等二つの型はモンゴロ的要素とインドネシア又はポリネシア的要素の交錯によるものと考へた。此の見解はドニケによつて踏襲されてゐる。北部日本と云ふ正確な意味は之に關聯して不明確であるが、ベルツは恐らく北海道を意味したものと思はれる。

ドニケは第一の型の代表者が我々の想像を絶する時期に朝鮮、對島、日本の南西部、壹岐島を通じて到着した種族の子孫たるものと考へられるとしてゐる。第二の型に關しては、紀元前七世紀の頃に九州の西海岸に侵入した蕃族の後裔から派生したものとされてゐる。之等の侵入者は未だ知られざる種族に屬する原住民と混淆して大和の國を樹立し、アイヌ族を北方に驅逐した。

此の傳統的なる説は大抵の教科書に見えてゐる所であるし、日本では長谷部⁽³⁾、松本⁽⁴⁾の兩博士、英國ではモラン⁽¹⁾の説く所となつてゐる。長谷部博士は、石川と岡山の二つの類型を、松本博士は筑前と薩摩の二つの類型の存

する事を提案してゐる。

之等の類型の特徴を簡略に述べると斯うである。石川型は極めて身長低く五呎二吋であり、約七八と云ふ値を持つ中位の頭形指數を示してゐる。顔は眞直ぐで短い。一方岡山型は高身長であるが、日本人の平均身長に適合すると云ふべく、五呎五吋である。頭は相對的に廣く、約八二の頭形指數を有してゐる。

他の二つの型は之等の變形である。筑前型は身長高く中頭であり、薩摩型は身長低く、廣頭である。之等二つの型は短顔を持つてゐるやうに思はれる。

之等の型の分布は次の如くである。第一の型は本土の中央部の北及び北東部に發見される。第二型は内海沿岸、京都近隣、本土の中央部の西に分布してゐる。第三型は九州の北部に、薩摩型は九州、四國の南部に見出される。

松本博士は第一型は石器時代の宮戸型の變形生殘者であり、筑前型は津雲型のそれであるとしてゐる。岡山型はモンゴール種族から出た朝鮮型なり、と長谷部博士は提案してゐる。

之等の類型の提案は先きに論じた初期の種族と、朝鮮から來た最後の型とを分離する所のものである。之等の説を裏付ける證據がどれ程あるであらうか。日本に見出される型は可成りあるのであるが、少くとも三つの類型を指摘する事が出来る。ベルツの提案せる分類は便利な分類であつて、觀察の正しさに裏付けられてゐる。ベルツは優美型(Elegante Type)の持つ繊細性は滿洲、朝鮮の影響を受けたものと考へてゐる。現代の日本人が此の興味ある要素を持つものであるかどうかは不明であるが、とに角岡山型の頭は丸く、滿洲型も朝鮮型も頭が丸い所から見ても、一應此の説もうなづけるものを持つてゐる。

日本人の總ては共通に一定の特徴を具へてゐる。毛髮は常に黒く、時として縮れた毛髮を見受ける。殊に本土の北部

に於て然りと云へる。其れはアイヌの血と混つた爲と思はれる。男女兩性の身長之差は明かに著しい。一般に身長は低いけれども、身長之差の變動は特に男性に顯著に見受けられるようである。肢は短く、頭は大きい。肢の短いのも拘らず、前肢は相對的に長い。頭形指數は可變的である。眼の色は實際には常に暗褐色である。兩眼の間隔は可成りあり、鼻梁は低いけれども、顴鼻が多く現れてゐる。頬骨は高いけれども、其れはまた可成りの變異を示してゐる。

皮膚の色も種々相違を示して居り男は通常のものよりは寧ろ暗色を示して居る。女の中の或るものは全く明るい色で、この様な場合には頬に蔷薇色の班點を持ち、また或るものは黒みが、つた黄褐色を呈してゐる。

地理的特徴の種々相を示せる日本の様な國に於ては、人種型の變動は全く原基種族から離れてゐるものと思はれる。此の多様性は疑ひもなく存するけれども、現在、其の類型のものが全く明瞭に分化してゐるようにも思はれない。更に身長之短く中頭型のもの、身長之高く短頭型のものがあるやうに思はれる。

最後に残るものは日本人の起源如何の問題である。住民の基礎がアイヌ族に緊密に近い種族たりとする提案を認めるには餘りに手堅過ぎる證據が存するやうに思はれる。此の古代種族は後の増加種族に著しく壓迫され、其の結果住民の一般的性格を變動させたのであり、今日優勢なのはパレアン人の型に屬してゐる。然し乍ら日本人が體質に於ても、氣質に於ても他のアジア人と著しく異つた種族である事を認めざるを得ない。

此の後に這入つて來たものゝ要素が如何なるものであつたか、についての認識は現在迄の所云々する事が出來ない。既に述べた通り、日本には朝鮮、滿洲の住民に近い要素があるものと思はれる。此の日本と朝鮮との結び付きは自然である。此の經路を傳つて繼續的な文化移動が行はれたのであり、全く支那文化の日本移入については此の事が

言へる。日本に朝鮮型と近似せるものを發見する事は、其れ自體何等驚くべき事ではないのである。此の型が日本に
道入つて來たのは比較的後期に屬するのであつて、石器時代には何等其の痕跡を認め難いのであるが、其れは初期の
金屬時代の末期に現れたものと思はれる。

此の型は黄色人とアルプス人に著しく近い種族との混淆から結果したものである。之等の種族が極めて顯著に
短頭型であり、何等混淆してゐない黄色人の例の中には見出されない特徴を有するものゝ如くである。

だが然し之等二つの系統は日本人の性格を考量するに充分なものと思はれない。ベルツはマレー系の血の混入が
あると提案した。又、實際疑ひもなく日本には南方からの影響があつたものと思はれる。マレー語を語る種族の意味
で、其れがマレー人たるべしとする事は當を得てゐない。總て南方アジアの住民は二つの系統の混淆の存在を示して
ゐる。それは本質的に極めて長頭型のものであり、他は短頭型の傾向を持つものである。若し日本人が之等の種族の文
字通りの後裔であるとすれば、我々は日本人の中にネジオトの血がある事を當然知らねばならない。支那の旅
者は先づ其の肉體型の相似せるのに出遭つて驚かざるを得ないのである。既に述べた如く原始マレー人と云ふ名稱を
用ひるならば、我々は南東アジアに於る黄色人のあるものを取扱ふに際しては便利な名稱と思はれる。此の南東アジ
アの黄色人は蘭印では分化する様になり、其の他の所ではネジオト近隣族と強く對照をなす型に分化するやうになつ
たのであるが、此の黄色系の分岐種族がまた日本民族の大部分を占めるものとする事は不合理でもなさうである。
之れは一見全く相反してゐる様に見える二説を調和せしむるに役立つであらう。即ち第一は日本人が其の體内に強度
なマレー系統を引いてゐるといふ説、第二は日本人が蘭領印度とよりは、取り分け一層南支那と密接な繋がりを持つ
てゐるといふ説が即ち之である。第一の説は比較的一般に認められた説であり、第二の説は最近モラントによつて提

案されたものである。

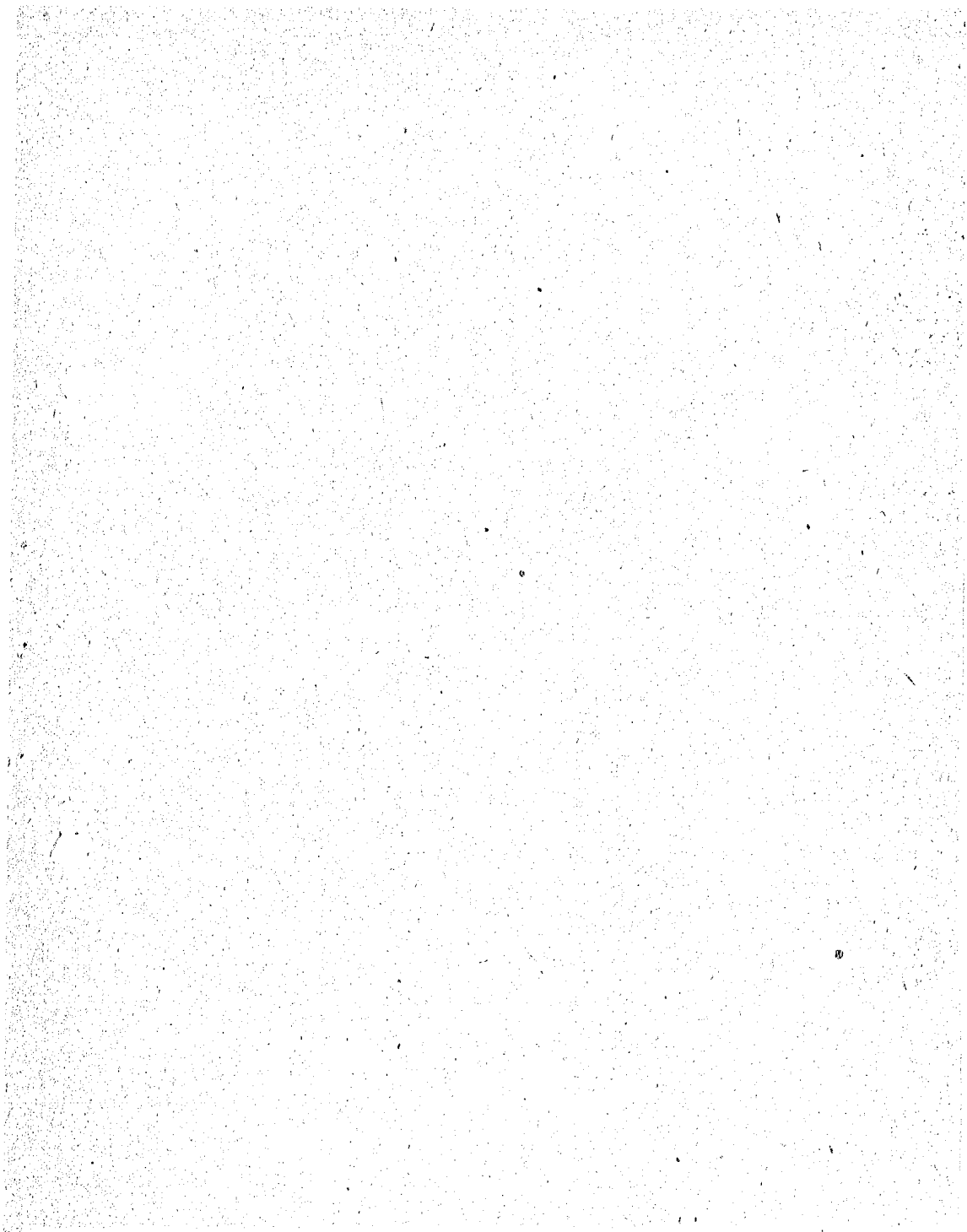
此の型は黄色人の比較的未分化形態をなしてゐるものであらう。それ故、假りに日本人の第三の要素は原マレー人に近い型であるが、今日では恐らく南福建の丘陵地帯に住む住民の中に最も良く表れてゐると提案されてゐる。我々は日本人が南支那人の直接的後裔ではなくして、寧ろ人種的にそれに近い種族の後裔とした方が良さそうである。

此の複雑な問題の解決は未だ完全になされてゐない。何故ならば、何時住民の主要型が變動し、或は日本人が蒙古人化される様になつたか、現在の所では我々には分らないからである。恐らく石器時代の終りか或は早期金屬時代の初めに於る古墓の中に、此の種の證件を探し求めねばならぬであらう。住民の唯一の要素がアイヌ族と朝鮮族であつたと提案する事は比較的簡單であらうが、此の解決だけでは依然として住民中の或る複雑な要素の説明に疑問の餘地を残してゐる。

第九章 關係 文獻

- (1) Koganei, Y. Globus, 1903, LXXXIV, 101.
- (2) Matsumoto, H. Amer. Anthropol. 1921, XXIII, 50.
- (3) Hasebe, K. Jap. Anthropol. Journ. Tokyo, 1918, XXXII, 1920, XXXIV.
- (4) Momro, N. G. Prehistoric Japan. Yokohama, 1911.
- (5) Various authors in the Journal of Research, Imp. Jap. Univ. Kyoto (Department of Literature). This Publication is devoted to the study of prehistoric Japan.
- (6) Koganei, Y. Mitt. Med. Fak. Imp. Jap. Univ. Tokyo, 1893, II, 1.

- (7) Koganei, Y. A. f. A. XXVI
- (8) Montandon, G. Archiv. suisse d'anthrop. gen. 1921, IV, 233
- (9) Donitz, W. Mitth. Deutsch. Ges. Natur u. Völkerkunde Ostasiens, 1874, VI
- (10) Schenbe, B. Ibid., 1882, XXVI.
- (11) Lefevre, A. et Collingnon, R. Rev. d'anthrop., Paris, 1889, XVIII (Sér. 3, IV, 129) (hair and eye colour).
- (12) Batschelor, Rev. J. The Annu. Lond. 1901.
- (13) Baelz, E. Mitth. Deutsch. Ges. Natur u. Völkerkunde Ostasiens, Tokyo, 1881, III, 330; 1885, IV, 35; 1900, VII, 227.
- (14) Baelz, E. Sitz. Anthropol. Ges., Wien, 1911-1912 [133], Riu Kin.
- (15) Brinkley, F. Smithsonian Rep., 1903, MDXXXVII, 793.
- (16) Chamberlain, B. Things Japanese. Lond., 1891.
- (17) Toldt, E. A. f. A., 1903, XXVIII, 142.
- (18) Adachi, B. Zeit. f. Morph. u. Anthropol., Stuttgart (Orbit and general), 1904, VII, 379 [Foot]. Mitt. Med. Fak. Tokyo, 1905, VI, 307 (Hand) id., 340 [Foot]. Journ. Anthropol. Soc. Tokyo, 1904 XX, 21, and numerous other Papers on the anthropology of the Japanese referred to in the above.
- (19) Shimada, K. [Central nervous system.] Acta scholae Med. Univ., Kyoto, IV, 1921, 319 (in German)
- (20) Baelz, E. Sitz. Anthropol. Ges., Wien, 1911-1912 [133].
- (21) Turner, Sir William. Proc. Roy. Soc., Edinburgh, 1907, XLV.
- (22) Report on Control of Aborigines. Gov. of Formosa Bureau of Aboriginal Affairs, Taihoku, Formosa, 1911.



第十章 南東アジアとインドネシア

此所で取扱ふ地域はアジア大陸の外圍地域及びアジアとオーストラリア、インドネシアを結び付ける島々であつて、其の中にはカンボチャ、交趾支那、安南、東京、即ち通例、佛領印度支那と呼ばれてゐる半島地域ばかりでなく、西方のシヤム、ビルマ、東方のインドネシアをも含めて考察せんとするものである。ビルマは行政的にも政治的にも印度帝國の一部を構成してゐるが、地理的、人種的にはそれと分離してゐる。此の地域の西部は、支那文明に其の文化の基礎を置く國の南方に打擴つてゐる。東部は文化的にも肉體的にも支那と印度とに交渉を有してゐる。それ故政治的位置と地理的細目の多様性にも拘らず、ビルマは人類學的目的のためには便利な一單位を構成してゐる。

此の地域は西藏、雲南兩山脈の根元から發して居り、熱帯地域に屬してゐる譯であるが、モンスーンの影響の爲に、冬には比較的冷い氣候を呈してゐる。

ビルマは印度とは海と高原地帯とによつて分たれてゐる。面積約二六〇、〇〇〇平方哩。地理的には五つの區域に分けられる。中央ビルマ、テナザリム、アラカン、チン高原及びシヤン州之である。中央ビルマは暑い高熱のイラワジの大三角洲を包含し、その大部分は米作に貢獻する所大なる地域となつてゐる。土地は水に恵まれ、住民は其の點まことに有用な土の上に生活してゐる譯である。此の國の北部地帯は依然として高濕、高濕地帯となつて居り、河の沿岸一帯の土は沖積層である。

此の地域の南部及び東部にテナザリム及びカレンニがある。其の中に海峽國があるが、其の大部分は稠密に繁茂せる熱帯森林で被はれた凹凸ある山嶽から成つてゐる。アラカンには稠密に森林の被茂つた地方を背景とせる熱帯マン

グローヴ・クリークのある沿岸地帯が包含されてゐる。

チン高原は海拔約五、〇〇〇呎から九、〇〇〇呎の可成り高い地域から構成されてゐる。其處から稠密な森林が繁茂して居り、一般に好適な氣候を呈してゐる。

最後にシヤン州は五〇、〇〇〇平方哩以上の巨大な地域を構成してゐる。一般に高さ三、〇〇〇呎から四、〇〇〇呎の間の高原から成つてゐる。此の高原の大部分は起伏せる高原國から成り立つてゐるのであつて、通常は樹木充分繁茂し、サルウィン河によつて二地域に分たれてゐる。其れは雲南と低ビルマ地方との間の連鎖地帯を構成してゐるのである。

シヤン州から支那文化がシヤムに遣入りこんだのであるが、今日のシヤムは實際には、バンコックに展開せる大峽谷が其の大部分であつて、其他メナム及其の屬國によつて構成されてゐる。幅、約一五〇哩、長さ六五〇哩の緩やかなる傾斜地帯である。シヤムは南方にはマレー半島に打擲つて居り、其れ故、唯に支那のみならずマレーシアと一つの連鎖地帯を形成してゐる。シヤム國の大部分は野生の荒い密林から成つて居り、其所を通る道はメナム峽谷唯一本であつて、それは人種移動の通路となつてゐたものと思はれる。

シヤム及びシヤン州の東にはフランスから影響を受けた佛領印度支那がある。是は又北方には雲南の高い斷崖と境を成して居り、支那の廣西省の南境となつてゐる。東方及び南方は海洋である。一般に此の地域は、メコン河及、赤河 (Red River) の二つのデルタ、及峽谷沿岸地帯から成つてゐる。

マレー半島の北部は今迄殆んど知られてゐないが、南部の地域は可成り吟味を加へられた所である。マレー半島は梯形状の山嶽地帯から成立してゐるのであるが、その方向は云はば北々西、及南々西を指し示してゐると云ふ事が出來

よう。其所には、又一般的連系から外れた孤立の高原地帯が存在する。此のマレー半島は、比較的狭いので河長は短い。主要なる河はベラク河、ペハン河、ケランタン河等であり、此の地域の住民に最も大なる重要性を持つてゐる。

ジャングル其れ自身は其の地域に住む人間の生活に於る最も支配的な要因を成して居り、眞の密林居住者たる原始民族、マレー人にとつては特に其の事が云へる。彼等は單調な氣候の中に生活してゐる。森林は暗く、而も極めて湿度が高い。氣温はペルシヤ灣の近隣國に於る程過激ではないが、日々の變動少きため、年平均温度は高く現れてゐる。森林は旅行者の眼には美しい獄窓の如く見えるが、現實は全く押へ付けられる様な氣温を呈してゐる。

人間の手によつて此の處地は開拓され、米作地や栽植地が存してゐるが、其の密林の大部分のものは依然として半島に残されてゐる。

微細な點では可成りの論議が存するけれども、東印度を東部と西部とに分けて考察する事に就いては、地理學者、生物學者双方の意見の一致を見てゐる所である。其の西部部はアジアと境を接して居り、云はゞアジアの潛入部と記述されるであらう。其の東部はオーストラリア大陸の一部を形成してゐるものと云ふ事が出来る。

動物地學的、及植物學的分離は既に恐らく往古の頃のものと思はれるが、其の分離は其の地域に住む住民の體質型を分類すべき決定的方法を現すものとして人種學者は考へてゐる。西部に於て住民の親縁關係はアジア的である。東部に於ては全く異つた住民型が支配的であり、其の最も顯著なる特徴は皮膚の色の暗色にある。この事からメラネシア、即ち黒色種族の島なる名稱が生れるに至つた。

成程、人類學的、動物地學的、植物學的分布は全き相關々係を有して居らない。セレベスは親縁的にはアジア的である。だが全體として人種的な及び他の生物的な型的一致は不一致よりもより大なるものがある。宗教的、社會的慣

習も全體として見れば同様な分離の跡を示してゐるのは興味深いことである。例へば古代ヒンヅー佛閣の跡を極度に残してゐる島は地理的にはアジアに屬してゐるものである。セレベス及び其の他の東方諸島は現在は斯る痕跡を何ら止めては居らない。

フィリッピンは二つの群島系列としての特有な地位を有してゐる。即ちアジア的な親縁關係を有せるボルネオと境を接し、三分の一は東部セレベスと、四分の一は我が臺灣と連結してゐる。地理學者や生物學者は其の正確なる親縁關係の問題に關して何等かの疑問を藏してゐるけれども、人種學者は其の點一層惠まれた地位にある。

人種學の見地から見て此の群島を二つの集團、即ち蘭印とフィリッピン群島とに分けて取扱ふことは便宜の方法と思はれる。だが然し此の分割は純粹に便宜的なものである。

楮、蘭印の最良なる地理的分割に關しては之迄可成りの議論が存在した。我々は以下次の如き分類規準に沿つて敘述する事にする。

〔第一〕 大スンダ群島 (The Greater Sunda Islands)

此の中にはスマトラ島、ジャヴァ島、ボルネオ島、セレベス島及其等の外周に存する小さな島々が包まれる。

〔第二〕 小スンダ群島 (The Lesser Sunda Islands)

此の中にはバリ島からチモール島に至る長い島線内のものが含められる。

〔第三〕 マラツカ島

即ち之である。ニューギニアは多くの點で此の集團に屬するのであるが、此の島の人種學的問題はアジアと云ふよりはオセアニアのものに屬してゐる。

西方の島々は各時期にアジア大陸の一部を構成し、また其れと互に連絡されてゐたと信すべき理由が多数存在するやうに考へられる。第二世紀の頃スマトラとマラッカとは續いてゐたと之迄述べられて來てゐる。東部諸島はオーストラリア大陸の一部を構成してゐたものゝ如くである。斯くて西方に於て、現代の住民が其の居を定めた頃に此の島は大陸の影響の下に曝された事になる。然し乍ら東部では其の條件は極めて相違して居り、其の地域に住居せる種族の形態及分布には、孤立状態が一つの重要な役割を演じたやうに思はれる。

スマトラは約六、〇〇〇、〇〇〇人と云ふ比較的大なる人口を容し乍ら、一六〇、〇〇〇平方哩以上の地域を構成してゐる。古生代の岩石が発見されるが、其の島の大部分は第三紀層から成つてゐる。其の主要な天然の特徴は南西沿岸に沿つて走るバリサン高山脈地帯である。此の山脈は無数の火山を容して居り、其の中の或るものは尙も活火山である。此の地帯の北東には廣大な沖積層平野が打擴つてゐる。西部沿岸、及び此の島の北東部には數多くの川があるけれども交通に有利な役目を果して居らない。然し乍ら平野は一層の重要性を有してゐる。最大の河はジャムビ河であるが、モエデ河は長く、交通の最も重要な手段となり來つたものである。スマトラの氣候は極めて暑く、其の湿度は相對的に大である。

ジャヴァ島はスマトラの約四分の一の大きさであるが極めて大人口であつて、約四〇、〇〇〇、〇〇〇人を數へる。此の島の最も際立つた特徴は大山脈があることで、之はビルマからマラッカに走る大地帯の連續と見る事が出来る。此の島の大低の山は火山であり、尙も活火山たるものがある。此の島の大部分は溶岩から出來て居り、全島の三分の二は山であるが而も島は驚くべき程肥沃な土壌となつてゐる。最も原始的な方法を以てしても住民全部の食料を供すべきものを生産する事が出来る。植物は繁茂して居り、其の中を通り抜ける事が出来ない。氣候は極度に暑く湿度も

高いが、此所ジャヴァではスマトラに於ると同様に高地には好適なる圍繞地域があり、庭は百花燦爛たる薔薇に満ち満ちてゐる。

ボルネオはスマトラと同様な氣象條件を有してゐる。寧ろ其の他の蘭印よりは異つた、而も一層規則的な地理的連續層を持つて居り、一般的性格として、ヨリ一層大陸的である。沿岸地帯は大部分は低地で沼澤地となつて居るけれども此の巨大なる島の大部分は處女林で被はれてゐると云ふ現況である。中央山嶽部から發し、各方面の海に注ぐ河が數多く存在する。人口は百五十萬に近いものと評價されてゐる。

セレベス島は比較的に未だ探險されざる地域である。其の奇妙なる狀態をしてゐるので注目すべきものとなつてゐる四つの長い山脈地の半島が中央から走つてゐる。隣のハルメイラ島は略々同様な形狀を持つてゐるものである。河は總て短く、航行に耐へ難きものである。其の地理は依然として未知の領域となつてゐるけれども、セレベス島は往昔の大陸から孤立したものゝ如くである。其の北部は赤道の氣候であるけれども、南部は決定的に濕季節と乾季節とを有して居り、此の點で他のものと相違してゐる。

マラツカ島は、小さな島から成る三つの集團を包含してゐる。又其れ等は典型的な赤道氣候を有してゐる。動物及び植物を見るとオーストラリアの生物學的地域に密接なる關係があることを示してゐる。小スンダ群島も亦此の生物學的地域に屬して居り、全體として島は乾燥せる地域となつて居り、其の西部近隣諸島と著しい對照を爲してゐる。

フィリッピン群島は極めて多數の島嶼から成る一大群島であり、其の大部分のものは狭い海峽によつて夫々分離してゐる。此の群島の三分の二はルソン(Luzon)及びミンダナオ(Mindanao)兩諸島により構成されてゐる。之等二諸島は大湖沼地域を包含してゐるけれども、島の大部分は極めて、山嶽に取巻かれてゐる。山と海との間に肥沃

な沖積平野があるが住民の大部分は此の狭い沿岸地帯に沿つて生活してゐる。

此の地域の人種は其の地理的分割に従つて自ら三つの部分となる。印度支那、マレー半島及び諸群島とが之である。

アジア大陸の南東部の住民はあれこれと多様に之迄分類されて來てゐる。ジョイス (Joyce) は三つの分類を示してゐる。第一のものは、初期ネグロイト住民の散在せる殘存種族であり、第二のものはモイ族を含むインドネシア集團、第三の種族型は南方モンゴリア族 (タイ族、シヤム族、シヤン族、北安南のトウ族、カムボヂヤのラオ族、安南人、ビルマ人) 之である。ジョイスはカマール族が恐らくはマレー人と他とインドネシア人との混淆と考へてゐた様である。

ドニケ (Deniker) は二層精緻な分類形態を提示してゐる。之は二つの主要集團と、混淆民集團とである。最初のものは數多くの種族を包含してゐる。モイ族を彼は奴隸種族として記述してゐる。クイ族は二つの人種的集團即ちシヤムの南東部及びカンボヂヤの北西部に於る集團と、シヤン州に於る集團との二つのものを含むとドニケは信じてゐる。前者はモイ族と同様な原住種族であり、後者は衆羅族の分岐種族である。モン族及びタラインは昔、低ビルマ地方の全地域を占めてゐたものゝ殘存種族である。シヤム族は、ピンタン地方及び他の南アツサム、交趾支那、カンボヂヤに住居してゐる。カレン族はメピンの上谷、アラカンの山嶽地域等に住んで居り、モイ族より遅れてビルマに入つて來たものと思はれる。最後に彼はインドネシア人をナガ族とセルング族の二つに分類してゐる。

混淆種族の中、ドニケは四つの集團を分類してゐる。

(1) カンボヂヤ族又はケマール族

- (2) 安南人
- (3) ビルマ人
- (4) タイ人

この中カンボヂヤ及チモール兩族を彼はマレー族又はクイ族とヒンヅーの混血との混血と見做して居り、更にタイを明かにインドネシア人と考へてゐる。彼は一定の體質的特徴を云々してゐるけれども、彼の分類が一部は文化に、一部は種族の言語に基礎を置いてゐることは明白である。

ビルマの住民に關して最も慎重にして充分な考察を興へたのはハーバート・ホワイト卿 (Sir Herbert White) であつた。彼の述べる所によれば、ビルマの住民の約三分の二はビルマ人であつて、それは、シヤン州、カチン、メン高原、及びカレンニに於るものを除いては、總ゆる住民に優れて支配的な要素であると彼は述べてゐる。シヤン族は、また住民中一つの重要な要素を形成してゐる。而して爾餘のものゝ中、最も數多きものは、チン族、カチン族、クレイン族及パロング族である。而して常に少くも數百年の間ビルマに數多くの支那人が居住してゐたやうに思はれる。現在之等の支那人は其の數を増しつゝあり、而も自由にビルマ人と混血してゐる。

之等の種族史は、ハツドンによつて簡勁に敘述されてゐる。彼によれば比較的最近に至るまでビルマの住民は、ネジオト族であつて、現在の、西藏ニビルマ族は揚子江の上流から導入つて來たものとされてゐる。「ビルマ人が紀元前六〇〇年以前に、イラワジ谷に達したと云ふ證據は別に何ら存しない」とは彼の言である。

此の地方の比較的接近し難い性格のために、此の地域には相互に可成り相連せる集團があり、種々の河谷は各々の集團を特徴付ける地域となつてゐる。そこでビルマを爾餘の地域と區別し、全地域を二分して考へるを至當とするや

うに思はれる。

少くも或る地域に於ては其の原住民がネグリートであつた事を暗示する證據が存在する。このネグリートは現にマレー半島に尙も生存してゐるものである。カンボジアについてベルノイは語り、此の種族は多年の間一つの集團として存在することを止めたけれども、住民の下層を構成してゐると結論してゐる。

此の地域に現れてゐる第二の集團成員は、所謂ネジト族に近い種族である。彼等は殆んどこの地域の原住民であつて、今日比較的非混淆状態に於る彼等を發見し得る場所は人里離れた山嶽地帯である。更に南方印度の所謂ドラビダ人種に親近せる一要素が存在してゐる。之等のものは明かにネジト族に親縁關係を持つてゐるけれども、彼等が特殊化された系統を現して居り、此の地方に到達したのは比較的最近のものゝ如くである。最後に一つの重要な要素がある。即ち之は其の言語や文化を住民に課したもので、支那から遣入つて來た種族である。パレアン族が即ち之である。

借以上の如く全體として廣く考へて、此の地方には少くとも四つの種族系統の痕跡が存在する。ネグリートの起源地が何處であつたかは我々は知らない。其の現在の分布は確かに南西アジアの一點を中心に散布してゐるのであるが、何時、何處から彼等が此の地域に遣入つて來たものであるかについて我々は言ふ事が出来ない。ネジト族の要素は今日依然として雲南に生存して居り、西藏雲南高原から此の國に遣入つて來たものとも言へさうである。ネグリト族は、現在迄の報告によればビルマには、何等の痕跡を止めて居らない。それ故我々が知る限りでは、ネジト族が此の地域の初期の住民であつたように思はれる。

印度から此の地域に向つて人種の東方移動があつたものと考へられが、恐らくそれはドラビダ系の人種であつてネ

ジオト族ではなかつたやうに思はれる。尤も彼等の一部分はネジトと緊密に接近したもので、ビルマ住民の中の長頭の種族たるものがある。ジョイスが南方モンゴリアと記述してゐる要素は、北方から此の地方に入つて来た。

テイルデスリ⁽⁹⁾は、モールメンの近隣に住むビルマ住民を三つの集團に分けてゐる。第一の集團は彼女が純粹ビルマ人と記述する所のものである。之はマレー人に近く支那人とは殆んど親縁關係なきものである。第二の集團はカレン人と名付けてゐるものであつて、之は第一のものとは反對に支那人に近く、マレー人に遠いものである。元來支那人はマレー系統よりはカウカサス系統に屬するから、之はビルマ系統と云ふよりカウカサス系統と云つた方がよいと彼女は説いてゐる。恐らく彼女の言はビルマ系統よりはカウカサス系統に屬すると云ふ意味であらうが、其の點は確かなものではなからぬ。

此の問題について一層明確に立論したのはモラント⁽¹⁰⁾ (G. M. Morant) であつて、テイデスリの資料を用ひて一層廣範なる内容を附興した。ビルマ人(A)は肉體的にはマレー型に結びついてゐるが、結局は南方支那人に結びついてゐるものである、と彼は提案する。之は確かにパレアン人より發展せる型と考ふべきものであつて、其の連鎖はモラントによつて提案されたものである。南方支那人は、暑い地方に生活してゐるけれども、現實には熱帯の居住者ではないのであるから、純粹ビルマ人を自して支那人型が熱帯的風土條件によつて特殊化されたものとも云へさうである。

第二の型についてはモラントに於ては少しく異つた取扱を受けてゐる。彼は其れを彼の東洋人種と云ふ一般的圖式⁽¹¹⁾の中には含めて居らない。然し乍ら、彼がチベット人(B)と名付けたものは其の他の東洋型よりは、ビルマ人(B)及び(C)に一層親縁關係を有せるものである。とも角、ビルマには北方即ち雲南高原に其の親縁關係を有せる第二の人

種がある。此の型は、南方支那及び西藏高原の住民に親縁關係を有するものである。如何なる場合にまれ、我々が觀察してゐる種族は黄色人に最も近いものではあるが、恐らくは其の他の血も混つてゐるものと思はれる。然し乍ら、ビルマ人の短頭なるものは黄色人と云ふ提案によつてのみは解決され得ない顯著なる特徴を有してゐる。何故なら地上の支那人の大多數のものは中頭型だからである。

然し乍ら、西藏高原及雲南には、アルプス人種の疑ひもなき痕跡が存して居り、タリム盆地西方に幾分純粹な型で存在してゐる。だからテイルズリがカウカサス系統の證據を見出したので、之をアルプス人とした事もさう不可能な事でもなささうである。ビルマ人の頭蓋骨は若干の點で他のものとは異なるものがある。即ち其れが東洋人の殘存頭蓋より短いばかりではなくまたそれより廣い。頭形指數は複雑な問題を水解させるに役立つ。鼻形指數は、通常人種特徴を見る好適な指標ではない。鼻は扁平である。

ビルマの外圍地域は人類學者の間に注目を引き付けて來た地域ではない。ヴェルノオ及びベネティア(A)は其の貴重なカンボヂヤ研究に於て、其所に少くも四つの系統が存在すると云ふ結論に達した。最初の而も最も古いものは、ネグリート族とされる。今日此の要素は全一體としての存在は認められないが、住民中の或る成員として認められ得るに過ぎない。

第二のものはネジオト族である。此の人種の殘存物は東埔塞(註)湖水にして面積最小八千方哩、雨季には八〇〇方哩に及ぶと言はれる)及其の屬邊の漁族の墓の中に見出される。之等の原始種族は尙も山嶽地帯に見出される。だが之等のものは少くとも後に侵入して來たものと混淆したものと思はれる。

第三の要素は、印度及び諸方の島々から來りたるものである。其の頭形は、中頭型又は半短頭型である。

第四の要素は蒙古及びモンゴロイドと記されるものである。

之は昔、ツアボロフスキー(S. Zaborovskii)によつて分析されたものよりは一層精緻な分類である。

併、以上ヒルマの人種を概観するに當つて我々はテイルデスリーの假定即ち、マレー系統と支那系統の存在を出発點として分析のメスを加へたのであるが、カンボヂヤに於ては正しく此の二つの型の存在を見る事が出来るのである。

マレー半島には比較的正確な調査 Winstedt, R. D. Malaya, London 1923. がある。其の調査には若干の顯著なる事實が現れてゐる。全人口は三百萬以上。之等の人口の中、現在の研究目的にとつて最も興味ある原住民は約、萬以上の數を算する。最近の増加は少く、或る種族の如きは死滅して居り、他のものはマレーに急速に流れ込み、其の密林種族としての慣習を喪失しつゝある。

一九二二年に一萬二千人を數へたユーラシア人の増加は一應除外して考へて、住民の中、其他の構成部分の増加は人口の大移住現象に其の原因を求める事が出来る。何故ならば、死亡は出生より其の數が多いけれども、住民は繼續的に増加してゐるからである。マレー人全數の約半分の者はジャヴァ、スマトラ及び其他の地域から大部分はゴム工業に募集されてゐるが、全く移住から離れて見ても増加の徴候を示してゐる。支那人は住民中第二の最大要素を構成してゐる。彼等は商人であり、マレー聯邦に於てマレー人と略々同數の人口數で、百萬以上を數へる。五〇萬以下の人口たるインド人は大部分は勞働の目的のために募集されたものであつて、主として南部印度から來航してゐる。大部分は苦力であるが、其の中には數多の小商人も包含されてゐる。其他約三萬人のアジア人がある。之等はシヤム人、日本人、アラビヤ人、猶太人等である。

支那人は住民中極めて興味ある要素を成してゐる。彼等は約五百年前、此所に來りたるものであつて、十五世紀の

初頭、マラツカに關する支那の記録が存在する。最も初期の支那人は厦門から來たものらしく、而して大多數の移住民は常に廣東人か福建人であつた。最も初期の移住民はマレー人と婚姻したものと如くであるが、彼等は常に支那に歸國した。最近支那婦人の移住民が増加したので、多くの支那人は支那國外に其の家庭を建設することが出来るやうになつた。こゝで支那人と云ふのは其の大部分は南方支那人のことである。今迄、此の興味あり、且極めて重要な要素を持つるもの、體質的特徴に關する文獻は存しないやうである。

インド人がマレーに有せる影響力は恐らく支那人より大きいものと考へられる。其の影響は政治的宗教的であると共に、また文學的であつた。マラツカではタミール語があつた。北方印度人中最も數多いものはベンジャブ人であつてベンガル人と同様五千人を數へる。

日本商人は第一次大戦の爲に増加したけれども、全體として、其の在住は最近であり、殆んど其の在住に影響を與へるものと云ひ得ない。之迄の人類學者はマレー人及び原住民に關しては大なる關心を寄せるのであるが、住民に大きな影響力を有する移住民に關しては然らうでなく、従つて資料も充分ではない。

之等の移住民を除外して考察するならば、マレー半島には三つの異つた種族が存在する。ネグリート族、サカイ族、マレー族、即ち之である。最後のマレー族中には原マレー人と其れから進化せる親近族とが含まれる。ネグリート族はケダラ及上ベラク地方に於るセマング族、ケランタンのパンガン族と云ふ種族名で知られてゐるが、約二千の個々のものに換元される。身長は低く、約一五〇糎程である。丸い頭を有せる場合多く、毛髪は縮れてゐる。クラカン、サー山脈からセラシゴル山脈にかけて住んでゐるサカイ族は半島の原住種族中第二の要素となつてゐる。彼等は北方でネグリート族、南方で原マレー族と可成り混淆した。セノイ族及ベンシ族は同一集團部分を構成してゐるけれど

も、サカイ族と云ふ名前は總て之等の種族を便宜的に包括するに用ひられてゐる。彼等は皮膚の色の點では少しくネグリート族と異つてゐる。彼等は實に半島の三集團中最も明るい色を呈して居る。彼等は言語上はモンクメール族と、肉體的にはヴェツダ族と結び付いてゐると云はれてゐる。一見、之等二つの説明は矛盾したものゝやうである。然し乍ら此の二つの説明は之等の種族の種地的地位を確定する場合には最も大きな價值を持つものである。

之等の種族と原マレー人との混淆せるものがベシン族である。

原マレー人及其の一層進歩せる従弟種族は半島住民の約半分以下のものを構成してゐる。だが地域を異にすれば成りの變異の跡を示してゐる。だが一定の共通なる特徴を抽出する事は出来る。毛髮は通常直で黒色、部分的には丸くなる傾向を持つてゐる。顔や身體には殆んど毛は存しない。皮膚の色には可成りの差違があり、暗オリーブ色から明オリーブ色、時としては赤い斑點を認める事が出来る。眼は常に暗色、時として斜であることがある。鼻は扁平で廣く、頬骨は際立つてゐる。顎は四角く、頭は短頭型の傾向を持つてゐる。

之等の特徴は原マレー型がパレアン人と緊密に連關あることを示して居り、全く時として其れと區別し難い事情を物語つてゐる。だが、其の型の分割を亞變異とするには全く充分な相違を認める事が出来る。半島で見出される原マレー型と群島で見出されるものとを區別する事は殆んど不可能と思はれる。

之等の地域の正確な人種學については（フイリツピン群島は除外して）今迄充分研究されてなかつた。一般的に言へば、群島には三つの類型、即ちネジオト族、パレアン人の特殊型、及びネグリート族が見出される。だが其の分布は等しく全地域に涉つて居らない。スマトラ島にネグリート族が居ると云ふ報告は存在しないやうである。パチン族は前ドラビダ人に近い系統に屬する跡を止めてゐると云はれる。南スマトラのオラングク族はヘッドン（Headen）に依

れば、極めて原始的な系統に屬するものゝ如くである。恐らく彼等は初期のパレアン人の型を現してゐるものと思はれる。スマトラ島の他の多くの種族中、縮れ毛の存在を見ると、ドラビタ人が現在より一層廣範に散布して居つたものと思はれ、集團としての前ドラビタ人は存在しないにしても、現住民の血管には相當彼等の血が流れてゐるものゝ如くである。

ネジオト系統は大部分は決定的な種族とは思はれないが、大なり小なり大抵の種族の中に見出される。他方パレアン人の要素は純粹な形に於ても、混淆的な形に於ても見出される。例へばバクツク族中には二つの型が存する事をフォルツは指摘してゐる。他方メタウエイ島人は殆んどネジオトと混淆せざる純粹人種たるものゝ如くである。パレアン系統に關する學術語については考察を加へる必要がある。通常其れを我々はマレー人と呼んでゐる。所で眞のマレー人はスマトラのメナンカイに於る一種族として起り、十二世紀にマレー半島に渡つたものである。十三世紀の終りまでに、彼等は廣く群島に散布した。モンゴールと同様に、彼等は唯だ彼等自身の種族のより廣範な展開に對してばかりでなく、同族語を話す種族に其の名を附與したのである。其の名前は一定の錯雜感を與へる事なしに一つの肉體型を意味する様に使用し得ないのであつて、言語形態と肉體型とは決して相關的な關係を有するものではないのである。だが然し此の地域に住む丸頭型種族には其の名は一般に使用されてゐる。ハツドンは種々の特殊化された近代的マレー人が派生せるパレアンの分岐種族を意味すべき原マレーと云ふ便利な名前を創つた譯である。

ジャヴァの巨大な敷を占める住民は人種學者にとつては特に興味ある領域を形成してゐる。其の文化は極めて慎重に調査されたけれども、之等住民には殆んど關心を示される事少かつたと云へる。ジャヴァ本島のケラング族は眞のネグリート族と云はれてゐる。純粹なネグリート族が此の島に生存してゐるものかどうかは極めて疑はしいが、此の

主張を確認するためには更に一層多くの證據が必要とされる。一先づ之等の事情を除外するならば、此の島には四つの種族集團が見出される。眞正マレー人はバタビヤ及其他の港市に、スンダ人は島の西部に、ジャヴァ人は中央部に、マドラ人は東部及マドラに夫々見出される。之等の種族の間の文化及び言語には相當の差違が存するけれども、體質的には殆んど差違なきものと云つてよい。各種族について種々の穿鑿が之迄試みられて來たが、總括的に言ふならば、等種族の祖先を原マレー人とする事は異論なきものと言へよう。彼等は極端に圓頭型であるが、之は南東アジアに住む同族集團と區別するにさう大した貢獻を與へるものとは思はれない。モラントは最近ビルマ人及アツサム人との關係に注意を向けてゐる。

移住民の歴史的考察に依れば、マレー族が初期の時代から島全體に散布してゐたばかりでなく、また基督時代の初期にインド人の影響があり、長期に涉つて此の影響は少くも文化的には優勢であつた事を示してゐる。

支那人との關係となると、之は全く別問題である。支那人は確かに初期の時代にジャヴァに訪れた。彼等は恐らく殆んど一、三〇〇年の間、此の島と商業的な關係を維持したものである。此の島の小貿易は大部分彼等の手で行はれたものである。今日此の島に來航する支那人の大抵のものは南支那沿岸の土着民である。

以上住民の體質に一つの重要な影響を持つた之等外國系の要素に加へて、文化と宗教に影響を與へたアラビヤ人もまた此の島に可成りの痕跡を止めてゐる。彼等の人口数は全住民の中でさしたる重要性を持つて居ないけれども、或る都市では其の體質型が確かに比較的純粹な形で残つてゐる。

ジャヴァ島に於る人種的要素を取上るならば、住民は二つの層に分けて考へる事が出来る。第一のものは充分に島に適應化する様になつた型である。此の類型の中にはネグリト族、ネジオト族、及原マレー移住民の後裔が含めら

れる。第二のものは比較的最近になつて此の島に移住して来たものである。彼等は先づ第一に原マレー人的要素に近いマレー族であり、其れ故彼等を區別する事は出来ない。次に印度から移住があつたけれども、最近移住せる貿易商を除いて、之等のものは佳民に顯著な刻印を残さなかつたように思はれる。第三には、佳民中の支那人の要素は古くから存在してゐる。最近の混血は容易に識別し得られるけれども、支那移住民の窮局の影響は未だ述べる事は出来ない。アラビア人の侵入者は、個々的に見るならば顯著な型となつて現れて居り、彼等が混淆せる所には其の根源的類型が保存されて居るけれども、全佳民の中に見る場合重要な要素として取上げる程の事もなし。

ボルネオの住民はホーズ (Hose) イクドール (Mc Dougal) 及びハドドン (Haddon) によつて慎重に研究されたから、インドネシアの或る部分の住民よりは一層よく人々の間に知られてゐる。だが此のボルネオの原住民がどのやうなものであつたかに就いては、我々は手懸りとなる證據を有して居らないのである。ネグリト族については何等の痕跡も發見されて居らない。またメラネシア人の要素も見出されるに至つてゐない。

ホーズ及びマツクドールによつて提案された此の島の人種史は最も充分な方法で現住民の起源について之迄提案されて来たものを考察してゐる。彼等によれば住民の主要源泉となるものは四つとされてゐる。ボルネオが本土に結びついてゐた時にクレマンタン族、ケニヤン族、プナン族が恐らくボルネオに居住して居つたと、之等の學者は提案してゐる。次に現在のカヤン族、ムルト族及びイバン族を含めての第二移動民の波があつた。カレン族は新鮮なモンゴールの血を受けたインドネシア族に最も近いものと思はれる。

其の種族の肉體がさう簡単に説明され得るかどうかは疑問と思はれる。初期の住民はネジト族であつたやうに思はれるが、各時期に極めて度々他種族と混淆した結果、原マレー人の影響の導入が決定的に何か特別な移住種族に歸

せらるべきものかどうかは極めて疑はしい處である。又同時に混淆せるものが本土にゐるか、島にゐるかも述べ得ない。然し乍ら邊鄙なる地帯にはネジト族の血が比較的純粹な形で保たれてゐる事は明瞭である。だが其の他の地域では、殊に沿岸地帯に於て、原マレー人及びマレー人の要素が支配的なものとなつてゐる。之はジャヴァ島の現象と相似てゐる。然し乍ら、疑ひもなく此の島には比較的容易に接近することが出来るためにネジト族の要素が大なる範圍に涉り、浸透する様になつた譯である。

フィリッピン群島の人類學は爾餘のインドネシアと多く平行的關係を有してゐる。最近のヨーロッパ系による影響を除外するならば同様であるが細目の點になると注意を要すべき差異が存在してゐる。アラブ族の影響は體質的なものと云ふよりは寧ろ文化的なものであり、恐らく住民の人類型には何等の影響を與へなかつたものゝ如くである。印度文化はこの島に廣範に涉つて影響を與へた。然し乍ら再び此所で、體質的影響が恰も全く見落されてゐるやうに思はれる。兎も角、ジャヴァ島に於る程それは廣く散布されなかつた。ジャヴァ島の其れと比較されべき何等の遺跡も見出されて居らないし、またバリ島に於ける如くインド慣習の根深い存続は殆んどないと云つて宜しい。インドと接した文化の影響は疑ひもなく著大であり、群島の最深部にすら浸透してゐるけれども、インドの肉體型の痕跡が残存してゐると云ふ事を暗示する證據としては何等存在しない。支那人貿易商は數世紀に涉つてフィリッピンを訪ねてゐる。フィリッピンに彼等の血の痕跡があると云ふ主張は全く尤もな意見である。然し乍ら支那人と原マレー人との親近性のために、混血の正確な影響を評價する事極めて困難であり、かるが故に問題は極めて困難なる研究領域を構成してゐる譯である。

併、フィリッピンの島民の大部分を構成する二つの基本的種族がある。或る時期に於ては、ネグリート族は全島と

迄は行かなくとも大部分の地域を占めてゐたものゝやうである。ヨーロッパ人が最初に此の島に來たときには、彼等と廣範に雜婚したものゝ如くであるが、現在は住民中極めて小さな部分となつてゐるに過ぎない。彼等は現在、此の島のおちこちの地域に散布して居り、大體四つの集團がルソンに、一つの集團が各々バラサン、ミンダナオに見出される。

之等ネグリート集團の存在に加ふるにモンテソス人又は高原人と通常呼ばれてゐる他の集團が存在する。之はネグリート族と何等かの親縁關係を持つてゐるようである。彼等は總て矮小人で、平均身長は一五〇糎或は其れ以下である。頭は總て丸型で廣い鼻の持主である。だが最も顯著なる特徴は毛髮が黒く而も多い事、皮膚色が黒いことである。疑ひもなくフィリツピンのネグリート族はアンダマン族の中の矮小族及びニューギニアの矮小族集團に密接なる關係を持つてゐる。之等の種族に關係ある一般問題については既にアジアの人種問題を考察するに際して述べて置いた所である。

フィリツピンの褐色人種をマレー人とインドネシア人の二つの集團に分けて考へる事は慣例である。此の分割の仕事は充分満足すべきものではない。通常の分類に依れば、ネジオト族として概略、一括される種族は總て極めて低身長で、一五一糎から一五六糎の間の平均値を持つてゐる事が知られるであらう。然し乍ら鼻形指數の點になると豫想以上の多様性を持つてゐる。南方印度の人種學的論議に於ては、一連の相似た事實が記述された。恐らく其の解明も同様なものであらう。ハツドンの提案によればスマトラには前ドラビヤの要素が存在する。彼はまた、東スマトラ、セレベスのトローの前ドラビヤ人と真正前ドラビヤ人との間の主要なる相違は長身長と圓頭型の傾向に求められる事を示した。ルソン島のポントク族、イフガオ族の種族の中で、平均身長は一五五糎、頭形指數七八七七、平均

鼻形指數は一〇〇—一〇二である。最初の二つの測定値は彼等を其の他のネジト種族から識別するのに役立つやうである。然し乍ら鼻形指數は、一つの明瞭な道標たるもの、如く思はれる。之等の種族は他の血液を交へてゐるやうであるが、南方アジアに於る最も古い種族の一つを代表してゐるもの、如くである。スマトラや其他の地域にはハツドンが主張した種族の痕跡が在る。彼等が特に興味あるものである事は、或る人類學者が彼等をオーストラリア人と同一種族と結び付け、それ故極めて往昔の時機に此の地域を占めたものとしてゐるからである。

フィリッピンの眞正ネジト族は其の低身長及び相對的長頭によつて識別されてゐる。鼻形指數は平均値八九・九三—九五を示してゐる。頭形指數は、通常八〇で前ドラビダ人より廣い頭を持つてゐる譯である。而も通常原マレー人よりは少しく長頭の様であるがそれも極めて微小であつて、さしたる重要性を持つものではない。之は恐らく兩者の混淆に基くものと思はれる。

以上何れの場合に於ても彼等の合成種族には少くとも二三の要素が混入してゐる事に注意せねばならない。ネジト族、或は原マレー人として區別される種族が總ゆる種族の中に支配的な特徴を現してゐるものと思はれる。

要約すればインドネシアに於る人種は少くとも四つの集團に分けて考察される。第一はネグリート族であるが、今日、其の分布範圍は限られて居り、僅かにフィリッピンに見られるに過ぎない。第二の集團は前ドラビダ人である。之は恐らく廣く散布されてゐるものであらうが、唯、散在的に發見されるに過ぎぬ。第三の集團は、ネジト族であつて、之はアジアの南西沿岸地方に發見される種族中に見出すことが出来る。最後に、住民中支配的な要素はパレアン系統に近い原マレー族である。總て之等の種族の歴史と移動は現在明かでない。更に其の他の種族の混入が認められる。就中、支那人は多くの地方で全住民中重要な構成比率を示してゐる。然し乍ら彼等は大部分最近の移住に屬して

ゐる如く思はれるから、群島の人種學を論議するに際しては、近隣族としての範疇に屬せしめて置かねばならない。

第十章 關係文獻

- (1) Logan, J. R. The Ethnology of Eastern Asia. Journ. Indian Archipelago, IV, 478.
- (2) Mc Mahon, A. R. The Karens of the Golden Chersonnese. Lond., 1876.
- (3) Milne, Mrs. L. The Home of an Eastern clan. [Palangs of the Shan States.] Oxford, 1924.
- (4) Anthropometric Data (Burman). Ethnographic Surv. India, Calcutta, 1906.
- (5) Lewis, C. C. Ethnographic Survey of India (Burma). No. 4 Calcutta, 1919.
- (6) Scott, J. G. Burma, Ahandbook, etc. 1906.
- (7) White, Sir H. T. Burma. (Provincial Geographies of India.) Camb., 1923.
- (8) Temple, Sir R. C. D. Journ. Roy. Soc Arts, Lond., 1910, LVIII, 695.
- (9) Hildesley, M. A. [Cranionetry.] Biometrika, Camb., 1921, XIII, 695.
- (10) Turner, Sir W. Trans. Roy. Soc., Edinburgh, XLIX, 719.
- (11) Scott, Sir G. Upper Burma.
- (12) Carey, Sir B. S., and Tuck, H. N. Chin Hills.
- (13) Hertz W. A. Myitkyina District.
- (14) Graham, A. W. Siam (Handbook). 1912.
- (15) Verneau, R., and Parnetier, G. [Cambodgia]. L'Anthrop., Paris, 1921, XXXI, 279.
- (16) Deniker, J., and Bonifacy, A. L. M. Bull. et Mem. Soc. Anthropol., Paris, 1907, 5e Serie, VIII, 106.

- (17) Zaborowski, S. *Ibid.*, 1897, 4e Série, VIII 44, and 1900, 5e Série, I, 327.
- (18) Roux, P. [Tonkin.] *Ibid.*, 1905, 5e Série, VI, 155 and 324.
- (19) Maurel, E. *Ibid.* 1889, 2e Série, IV, 459.
- (20) Vereau, R. *L'Anthrop.*, Paris, 1909, XX, 545.
- (21) Abadie, M. *Les races de Haut Tonkin de Phong-Tho é Lang Son*, Paris, 1924.
- (22) Martin, R. *Die Indienstämme der Malayischen Halbinsel*. Jena, 1905. [The standard textbook and a mine of information.]
- (23) Annandale, N., and Robinson, H. C. *Fasciculi Mhalayenses*. Lond., 1903.
- (24) Skeat, W. W., and Blagden, C. O. *Pagan Races of the Malay Peninsula*. Lond., 1903.
- (25) Winstedt, R. O. *Malaya*. Lond., 1923.
- (26) Morgan, J. *L'age de pierre polie dans la presqu'île Malaise*. *L'Homme*, II, 494.
- (27) Swettenham, Sir F. *The Real Malay*. Lond., 1900.
- (28) Swettenham, Sir F. *British Malaya*, Lond., 1606.
- (29) Turner, Sir W. *Trans. Roy. Soc., Edinburgh*, 1907, XLV.
- (30) Evans, I. H. N. *Religion, Folklore and Custom in North Borneo and the Malay Camb.* 1923.
- (31) Skeat, W. W. *Malay Magic*. Lond., 1900.
- (32) Schmidt, W. A. f. A., 1906 N. F., V, 59.
- (33) Giuffrida-Ruggieri, V. *Archiv. Anthropol. Ethnol.*, 1916, XLVI, 125.
- (34) Hagen, B. *Anth. Studien aus Insulinde*. Ver. Kon Akad. Wiss., Amsterdam 1890, XXVIII.

- (35) Hanny, E. T. Les races malaises et américaines. *L'Anthrop.*, 1896, VII.
- (36) Hanny, E. T. [Afonous de Gilolo.] *Bull. Soc. Geogr.*, Paris, 1877, 6, XIII, 491.
- (37) Meyer A. B. *The Negritos*. Dresden, 1899.
- (38) Quatrefages, J. L. de. *The Pygmies*. Lond., 1895. [Les Pygmées, Paris, 1877.]
- (39) Turner, Sir W. *Trans. Roy. Soc.*, Edinburgh, 1907, XLV, 781.
- (40) Hagen, B. *Veroffen. Stadt. Volker-Muc.* Frankfurt a. M., 1908, II.
- (41) Voll, W. A. f. A., 1900, XXVI, 719; XXXV, 89.
- (42) Voll, W. *Nord-Sumatra*. (Tw6 Vols.) Berlin, 1909 and 1912.
- (43) Garrett, T. R. H. *J. R. A. I.*, 1912, XLII, 53.
- (44) Szalay, C. H. [Japanese Women.] *A. F. A.*, 1899, XXV, 233.
- (45) Haddon, A. C. *Archiv. Anthropol. Ethnol.* Florence, 1901, XXXI, 341.
- (46) Haddon, A. C. Appendix to 47.
- (47) Hose, C., and Mc-Dougall, W. *The Pagan Tribes of Borneo*. Lond., 1912.
- (48) Kohlbrugge, J. H. *Mitth. Niederl. Reichanus. f. Volk.*, II, 5.
- (49) Sarasin, F. *Mat. Naturgesch. der Insel Celebes*. Wiesbaden, 1906, V, Pt. 2.
- (50) Beyer, H. O. *The Population of the Philippine Islands in 1916*. Manila, 1917.
- (51) Folkmar, D. *Album of Philippine Types*. Manila, 1904.
- (52) Meyer, A. B. *The Negritos*. Dresden, 1899.
- (53) Reed, W. A. *Negritos of Zambales*. *Ethno. Surv.*, Manila, 1905, H. I.

- (54) Sullivan, L. R. Racial types in the Philippine Islands. Anthropolog' Papers, Amer. Mus. of Nat. Hist., New York, 1918, XXIII, L. [Reference to all the literature.]
- (55) Bean, R. B. Racial Anatomy of the Philippine Islanders. Philadelphia, 1910 [an unconventional work].

第十一章 結論

私はアジアの主要種族の體質的性質を記述せんと試みて來た。斯る記述は廣範な線に沿つて事實を述べ、極めて大多數の詳細な事實の陥穽を避けんがためには、どうしても簡略なものとならねばならない。亦それは、品調べの性格を何等か持つに相違ない。即ちそれは、豊富な知識と科學的な觀察の缺乏を示してゐるのである。各種族の生物學的研究から見ると、環境が人間形態の形成に一つの重要な役割を演ずべしと信ずる理由が豊富にあるけれども、色々な地域の住民が地方的集團として記述される場合には、その現在の環境よりは寧ろ、彼等の歴史や移動と容易に關聯づけられ得ると云ふ事が知られるであらう。まさしく同一の條件と思はれるものの下に生活してゐる種族の間で、極めて明瞭な差異を呈せる型がある。他方、型の分布が地圖上に記載される場合に、環境の巨大な相異にも拘らず、それは屢々恆常性を保持してゐる様に思はれる。私が示さうとした様に、一定の特徴は環境と相關々係にあるものと思はれる。斯る研究に對する材料は集積されつゝあるので、斯る研究の基礎となつてゐる表を作成する事が殆んど身近くに容易なものとなつてゐる。

明らかに環境に應ずる變異は大部分はその適應過程に於いて緩慢であるに相違ない。我々はアジアの初期の人種史に就いては殆んど現在知る所がない。近代史及び我々の持つてゐるが如き初期の歴史の斷片の多くは、人種の大移動があつたと云ふ事を明瞭ならしめてゐる。時として之等の運動は匈奴の侵入と同様に激動的であつた。他のものは極めて緩慢であつた。斯る種族移動があつたばかりでなく、亦彼等は違つた系統の混淆を可成り受けたのであつた。人類は大部分肥沃な雜種を作り出す事が出来る様に思はれ、斯る雜種増殖がアジアに於いて劫初の頃から行はれたと信

すべき理由がある。ここでは然し、人種學者に直面する多くの困難が存在する。最大のものの中には環境の影響や移民の結果や雜種繁殖の結果がある。之等三つの事例の影響を解決する事は困難である。

最近のヨーロッパ植民は問題を容易にしなかつた。だが然しヨーロッパの雜種は例へば中央アメリカに於ける程、土着人種の割合に於いて少數のものと思はれる。だが然しある所では、彼等は影響を免れ得なかつた。

アジアの全人種問題の中最も興味ある特徴の一つは國民的及び心理的要因に關するものであるが、その肉體を考察する場合には無視され得ないものである。何故なれば、之等の要因は屢々肉體と緊密な關係を持つてゐるものと考へられるからである。最近ヨーロッパ人種に依るアジアへの可成りの移民があつたが、一方亦、それに相應じて此の大陸から出て行くアジア移民が見られた。斯る移民を制限せんとする色々の努力が加へられた。その理由は結局經濟的なものであつた。だが然し、經濟的要因は生物的背景を持つてゐる。東アジア種族は長期間に涉つて、ヨーロッパの種族が持つよりは一層困難な條件の下に生存する事を強ひられた。それ故アジア人は普通のヨーロッパ人に比べて、不可能にして極端に劣悪な經濟的條件の下に生存を續ける事が出来るのである。アジアとの經濟的競争は彼等自身の國家には不愉快なものであり、それ故彼等は色々の立場で一定の國から閉め出されたと云ふ事が多くの國民に依つて感ぜられて來た。此の排外政策は屢々人種的なものと呼ばれてゐるけれども、通常は國民的なものの上に實行されてゐるのであつて、眞に人種的な背景の上に行はれてゐるのではない。體質的には、ヨーロッパの或る人種とアジアのそれとの間に殆んど差異がないと云ふ事が論決された。他方に於いて私は國民性、文化、宗教及び言語が屢々現實の體質的問題から全く獨立のものである事を示さうとした。

それ故私が上述した如き問題は、人種學の當面せねばならぬ研究とは全く離れてゐる。だが其れ等は屢々人種學者

から資料を借りてゐる。生物學的に言つて極西から東に至るアジアの大部分の人種は、ヨーロッパのそれと密接な關係を持つてゐる。彼等の間の差異は地方的變異と云はるべきもの以上に出てゐない。尤も或る場合に於いてその文化は、亞人種と云ふ語を使用するに充分である様に思はれる事もある。だが然し東アジアに於いては、黄色人と便宜的に呼ばれてゐる種族集團が廣く散布してゐる。それ等は一層往昔の時代には、ヨーロッパの人種と結び付いてゐた様に思はれる。その相異の程度ですら一定の範圍に涉つて論議せねばならぬ問題を構成してゐる。最後に南東アジアの遠隔なる地域には、他の二つの集團と廣く分離されてゐる全く異つた型の痕跡が存在してゐる。

ネグリート族はアジアの種族の一部を形成するには極めて少數である。黄色人は極めて數多く、恐らくアジアの住民の大部分は此の種族に屬してゐるであらう。だが、その他の人種も可成りあり、相當の數を占めてゐる。大なる種族系統の變異が比較的少ない事も亦、大多數の中に現はされてゐる。だがそれ等は一定の顯著なカテゴリーの中に分けられるであらう。現在集められてゐる證據を以て判斷され得る限り、之等の變異は一定の顯著なる地域に支配的である様に思はれる。その結果、詳細に涉つては相異なるにも關らず、廣範圍な輪廓に於いて一定の地域を占むる體質型を述べる事は可能である。だが然し之は、言語又は宗教の分布を割り當てるに際して獲得されると同様な正確さではなされ得ないのである。それは決して近代國民がその政治的境界を限定せんとしてゐる精密な正確さを以てなされ得ないものである。

